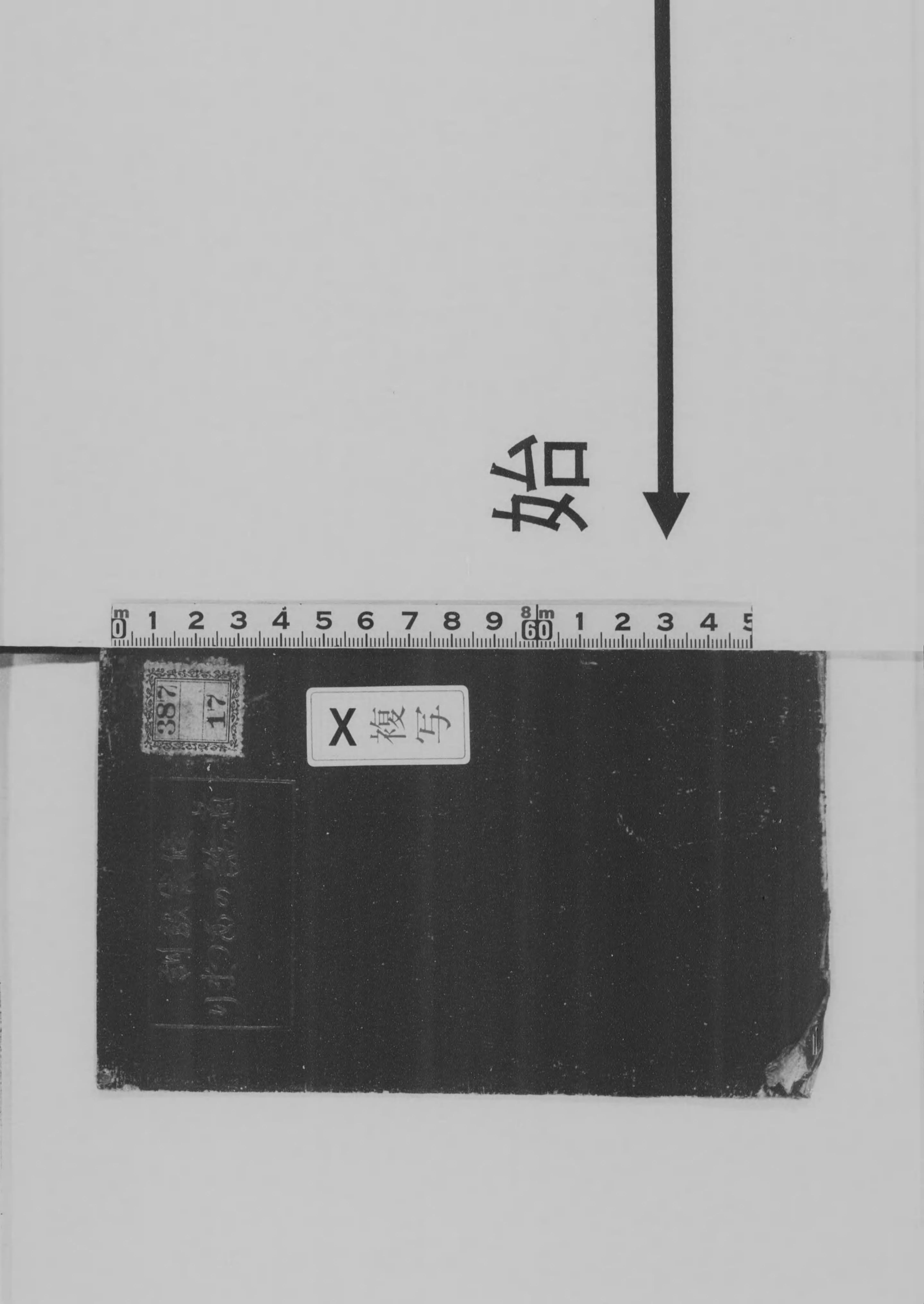
387
17
X 複写

修養教訓
道徳のあり方

387
17

×

387-17

修養教訓道徳のあつまり

大正
8 5.21
内交

序

我畏友水野庫治郎氏は多年初等教育に從事し公務の餘暇常に通俗教育に力を致せり其の老幼婦女子を訓誨するや概ね俗談俚諺に依りて高遠の道義を釋き諧謔笑話の間に於て知らず識らず人倫を理解せしむ

氏頃日職を退くや專ら身を通俗教育の事に委ね更に心學を研究し所謂道話の平易俚俗にして其の精神の克く時弊を救ふに適するを認め其の粹を採りて其の雜を捨て世態に斟酌し人情に徵證し此の書を編して余に示さる余これを閲するに其の說く所は皆

日常生活を離れずと雖も歸するところは忠孝節義に本きて孟子立命の教義に合し民俗改善の資料に適するを見る惟ふに現今の人多くは安心立命の何たるを解せず動もすれば名利を逐ひ逸樂に耽り或は得喪の巷に煩悶し或は情慾の淵に墜落し終生昏々として安宅正路のあるを知らず眞に悲むべしとす

此書を讀む者克く思を說話の本旨に留めて以て正路を求め安宅を尋ぬるの光明として夙夜修養に勉めて懈らざれば庶幾くは孟子の所譜天賦の正命を立て得て至幸の境界に安住するを得んか

江尻庸一郎記す

はしがき

むかし心學者は倫理道德の講話を爲すに常に趣味ある卑近の例話を引證して聽者をして厭ひ倦むことなく談笑裡に不知不識聖賢の道を會得せしむるをつとめたり是を以て市井、田野の匹夫匹婦に至るまで皆歡んで其の門に競ひ赴き其の說話を聽きて迷を解き道を悟り感奮興起して非を改め善に就き以て一生を誤らざるを得るに至りし者多く其の世道人心に稗益する尠からざりしなり。

本書はそれ等心學者の講話中より其の精を集め粹を拔き取捨撰擇して現今の世情に適するもの二三を集めたるものに過ぎざれども幸にして精神修養の一助ともならば編者の本懷之に過ぐるはなし。

南總小糸河畔に於て

編者しるす

道話のあつまり

目次

人の運勢……一
本然の性……一四
積善・積富……二五
諸人安樂傳授……三四
心の洗濯……四一
萬相談所……五〇
福相になる傳授……六一

乞食か君子か……七六
飽食暖衣……八一
親の心……八四
正宗の銘刀……九〇
人間の敵……九七
幸福の秘訣……一〇四
人の道……一一七
心の持ち様一つ……一二七
西郷隆盛が拳骨で打たれる……一三二
不孝の罰……一三四
諶の天の明命を顧みる……一三八

鬼賣り……一四四
猩々の失敗……一四九
金平糖を掴んだまゝ……一五九
禍は必ず蕭牆の中より起る……一六六
眼鏡屋の頓智……一六九
三人づれ……一七九
多くの人の失敗を取り易き物……一九二
立身始末の秘訣……一九六
立身成功の基……二〇五
安心立命……二〇九
放心を求めよ……二一七

大黒天……二二四
孝行になる傳授……二三一
敬畏の心……二四四
親の賣物……二五一
物忘れ……二五八
緋仔の極樂參り……二七〇
不調法者……二七三
心の安否……二七八
心の過失を去るべし……二八〇
心の着物……二八三
同情の美……二八五
德孤ならず必隣あり……二八九
貞女……三〇二
洗ひ給へ清め給へ……三〇五
同情の涙……三一〇
女子の本分……三一一
順の道……三一五
慈忍……三二一
心の持ち方……三四〇

道話のあつまり 終

修養教訓

道話のあつまり

水野庫治郎著

人の運勢

ある所に博識多才の翁がありまして、中々易が上手でした。或る日一人の娘が參り「私縁組のことに就いてお占を願ひたう御座います」といふと翁は算木を投げて云ふに「望み人は二人ある、一方は他に言ひ分はないが男振りが少し惡るく、一方は男に不

足はないが他の事に少し言ひ分がある」と娘は驚いて「さて〳〵よく當りました、仰せの通り一方は器量に不足はありませんが、宅の親達が申すには、其の方は暮し方が好過ぎるの格式があり過ぎるとの事、又一方は萬事質素に儉約を守る家で、親達はこの方が望みなのですが容貌は左程で御座いません」「そして御兩親は何んと申されます」「はい親達は質素の方が望みなのですが又私の顔を見て緣の道ばかりは押し付けられないからお前の心次第だと申します、で私も心が迷ひますので一層先生のお占ひに委せ樣と存じまして御伺ひした次第であります」といふと翁は目に角を立てゝ占ひは以て疑ひを決する爲めのものである、疑ふことがなければトひの必要はない同じ道が二筋あつて尋ねる人がない時にはトつて天にまかせる、一筋道にトひの必要は更にない、この緣組に疊算もいるものか緣の道は押し付けられぬなど と親達も親達育て方が惡るい御身も嫁入りしたら――子を持つて知る親の恩――今に思ひ當る事があるだらう親の子の思ふことは苟めではない自分達の死んだ後にも

左あらうか右あるまいかと末の末迄案じて居る親の安心する方は娘の不機嫌、娘の望む方は親の心配、そこに氣も付かず唯々目前の男撰みは笑止千萬、親の指圖は天の指圖である、親に背けば天に背く天に背いて何處で身が立つと思ひますか、殊に女といふものは貴賤共に親に添ふ日が至つて少い、盡しても盡しても盡し足らぬのは女の平常、嫁しては夫に事へ舅姑に孝行を盡し、老いては子に從ふべき身で生みの親に事ふる日はほんの十五年か二十年、孝行に足らずとも親の望む方に行つて安心させるのがせめてもの孝行ではありませんか、そんなに泣かずに涙でもふいて歸つて親のいふことをお聞きなさいと理非を極めて話しました、娘は感じて聞いて居りましたがどうも有難うございました、仰せに從ひまして天命にまかせましようと歸りました。

次に參りましたのは角帶に前垂れ掛け一見してわかる商家の番頭、伏目勝に頭を搔きかき「私は十二の時から或る家に奉公に參りまして、當年取つて二十五才になり

ますが、實は少々主人の金を費ひ込みまして其の穴を埋め樣と、もがく程にあせる程に尙更損が嵩む計り只今では殆んど百計が盡きましてございます、此の上は逃走する外はないと固く決心致しました、就きましては追手のかゝらない方角を一應見て載きたう存じます」と飛んだことを申して參りました、翁は危ない危ないとかぶりをふつて「梟塒を變ふるといふ卦である」と示し、扨その說明に昔一羽の梟が東を指して飛んで行く處へ出遇つたのが鳩「おい〳〵大層急いで居られる樣子だが今頃何處へ行くのか」と尋ねると梟は答へて「實は此の里の人達がおれの聲の惡いのを嫌ふによつて他へ立ち退く事にした」と鳩はポツポと笑ひながら「それは無駄なことだ止めた方が宜い」と梟はあやしんでそれはなぜであるかと聞く鳩が答へていふには「飛んで行く先の人もやつぱりお前の聲の惡いのを嫌ふに極まつてゐるそれよりも先づ自分の聲を直す方がよい、さうすれば折角なれた此里を今あわてゝ飛び出す必要もあるまい」といはれたさうである、だからお前も其通りにし歐米の

方へ逃げたにしろ心の惡いのを直さぬ以上は矢張り梟と同じ事、何れに行くも惡る者で一生を終るより外はない、今主人や親に不忠不孝をしては折角今日迄務めた甲斐がない、此際早く本心に立ち返つて過ちを改め詫び入る方がよい、こゝが卽ち――過つては改むるに憚ること勿れ――といふのである。然し今更本心に立ち返つた所で金は皆費ひ果すし、世間の所謂後の祭りで仕方がないと思ふかも知れぬが、これまでの過ちは是非もないによつて幾重にもお詫びしてお免しがあつたら前非を忘れず一層奉公に務めたがよい、費ひ込みした代りに給金も仕着せも辭退して運よく宿入りが出來たら其の上で殘金を償ふのがよい、よし又免しがなくて如何やうの咎めに逢ふとも善心にさへ立ち返ることが出來ればそれが眞の人間の道に入つたので社會が明るい譯である、免しがなくも――身から出た銹――でまた誰をか怨みんやである。然し大概の主人なれば改心の眞意が判れば許す事が當然であると懸々論しました。

其次ぎに來たのは正直さうな老爺で手前の渡世は小糠商賣まんまと糊口ばして居りますが量り切つた身代で、大晦日には何時もながら磨り拂ひ、年中糠働きも殘念と存じまして今度商賣替をする心組これ〳〵の商賣の中何れが私の性に合ひませうか一つお占ひ下さるやうと翁は小首を傾けて曰く「一升入りの德利に一升しか入らぬ」何商賣も同じ事で合ふと合はぬは時にある、律義一遍に仕馴れた小糠商賣が何より可かろうよ――人間萬事塞翁が馬――といつて其の許の輕い渡世が藥になつて達者で居るのやら、商賣を代へた爲め心配が多くなつて煩つて死ぬやら、代へた商賣が繁昌して俄かに金持ちになるやら、其の金故に盜みに遇つて命までも取られるやらその時になつて見なければ解つたものでない、西へ行つたら犬に嚙まれて大怪我をしたといふけれど、東へ行かなかつたのが何程の仕合せやら、内にさへ居れば此の足に負傷しなかつたであらうものをと悔むけれど、棚の物が落ちて來て頭へ疵が付かうやら、その疵のお蔭で持病の頭痛が治るやら眞に人間萬事塞翁が馬である。然し此の人間萬事の中へ少しでも私が入れば塞翁が馬とはいへない、すべき事をせずすまじき事をしての禍は自分から求めるので、萬事に私を交へず愼みを加へて其の上に來る禍福吉凶苦樂は皆塞翁殿に任せて置くがよい、これが易きにゐて命を待つといふことで人間の踏むべき正道である。と話しましたら喜こんで歸りました。今日は中々客が多い今一人は手に算盤蛸の當つた一目見て慾張り屋と知られる商人風の男で私は失せ物に就いて御判斷を願ひたいので御座いまして、實は一兩日前金子五兩硯箱の引き出しに入れて置いたのですが、怜度其の時來客に取り紛れて忘れたまゝ褥に付きましたが、翌朝不圖思ひ出して引き出しを見ると其の金がないのです萬一思ひ違ひではないかと種々考へて紙屑籠まで搜がしましたけれど更に見當りません、彼此考へました所何うも疑はしいことがありますので窃に心をつけて見ますると其の人の顏色物のいひ振り振舞に至るまで確かに……とは思ひますけれど何分これといふ證據のないことでいひ出して可いものか惡いものか判斷に苦むのです、

何卒御判斷に預りたいもので……と一文字に口を結ぶ、翁は輕く溜息をして過つて人を疑へば人と我と共に亡びねばならぬ危いことぢや、昔斧を失した人があつた、隣りの子を疑つてその顏色から聲音起居動作を見ると一から十まで盗みでないのはない、日を經て他から斧の斧を持つて來たものがあつてお大事の品永々ありがたう難うと返す、斧の持主初めて疑ひが晴れ其の後隣の子を見ると顏色其の他微塵も盗人臭ひ所がなかつたとか、これ等は斧に心を失つたのぢや、貴公もその失つた金を尋ねるより先づ其の失つた本を尋ねられよ、唐土に羊を牧ふ者が二人あつて其の一人は書物を見入つて羊を失ひ、今一人は博奕をして羊を失つた其の所作は違ふけれど羊を失つた點に於ては二人共同じことぢや、羊を失つたのは先づ本心を失つたからで書物も書物の見方によつては其の本心を失ふ、況してや博奕、名聞、利慾、色慾等に於てをやぢや恐るべきことではないか。

その次に威張つて出た男 熟柿臭い息をぷうつと吹いて目を据ゑきつと翁の顏を見て酒の損益が聞きたいのぢやとまるで喧嘩面、けれど翁はちつとも驚かず徐ろに口を開いて、

「諺にいふ一杯人酒を飲み二杯酒酒を飲み三杯酒人を飲む」と冬は寒さを凌ぐけれど春の花にも秋の月にも酒を飲む人は少くて多くは酒が人を呑む、子の曰く「たゞ酒に量なし亂に及ばず」と人には上戸もあれば下戸もある、其の數に量りはないがたゞ亂に及ばぬのを限りとする、柔弱な又多慾の輩は得て酒に呑まれ、外は行を敗り内は德を敗る、これより大きな過ちはない、既に亂れるとなると輕い時には病となつて脾胃を損じ瘀血を釀し其の他酒からおこる病は一々擧げるに遑がない。又重い時には父母を忘れ命をもおとす、或は國をも亡ひ家をも破り海山も飲み田畑も飲み牛馬も飲み娘までも飲む、此の類ひ世間にその數を知らぬと酒の攻擊が甚だしい生醉ひ癪にさはつたか臂を張つて大に怒鳴るだまれ先生、貴公は下戸の分際として酒の効能が何うして解るか、貴公は酒の過ちのみを知つてその德を知らないのだ

――酒は憂ひの玉箒――といつて五六杯も傾けると憂ひでも屈托でもさらりさつぱりと掃き散らして心にかゝる雲もなく、泣顔忽ち笑顔となる、これが酒の第一德だ素面の時は一人では心細く夜道はたつた一里も行かれない、飲めば忽ち千人力山でも川でも平氣なもので却つて夜道が面白い、これが酒の第二の德だ、何か談判することのある時など酒の力を借りなければ心も弱く口も重く下戸にさへやり込められる、不思議なるかな一旦酒が乘り移ると傍に人なきが如くで、長者であれ先輩であれ理を非に曲げてもいひ伏せる、これが酒の第三德だ、あゝ酒なるかな酒なるかなと滅多に一人で嬉しがる翁は冷然として貴樣の所謂德は我が所謂過ちぢや、人は賢愚となく老少となく憂ひのない譯には行かぬ、父母が病に臥されるか又は身まかられても貴樣は酒で憂ひを拂ひ泣顔忽ち笑顔となる、これが過ちの第一ぢや、孟子の曰く――命を知るものは岩牆の下に立たず――危きを恐れぬのは天命を知らぬのぢや、夜道が面白いの山も川も恐れぬのといつて爲めに禍を招くのはこれ亦過ちでは

ないか、貴樣傍若無人に爭ひ理を非に曲げていひ伏せるのを酒の德ぢやといふが口は禍の門酒はこれ禍の根ぢや、否待て貴樣はまだ醉ひが醒めぬまあ〳〵休め後に逢はう、否休まないとかぶりをふつて、酒の論は暫く措いて口が禍の門なら昔善導大師は口から彌陀を吹き出したとのこと、これは一體何うしたのだ誰かの歌に、

唱ふれば佛も我もなかりけり
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

口からは佛を出さうと鬼を出さうと嘘を出さうと眞を出さうと勝手次第、福も出れば禍も出る、親しくなるも口疎くなるも口成るも口ぢや、口ばかりが然うなのぢやない、盜みをする手もあれば駈落ちする足もある、種々樣々と不義の道具を持つた身ぢやからお互に慎みが大切ぢや古語にも――一言以て國を興し一言以て國を亡ぼす――とあるではないか。

扨又その次に參りましたのは輕薄さうな一人の紳士、肩臂張つて進み出たのは如何

にも立派なれど翁の目から見ればてんで人間の價値なき者、懷中より取り出したるは金と白金製の美々しき時計、拙者の身には少し奢り過ぎるかとも思ふが餘り珍らしき故性に合つたら求めようかと思ふと昂然としていふ、翁冷然として曰はく「自身心に奢りと思ふ品は卽ち性に合はぬのぢや奢りは微細な所を愼まなければならぬこれ程のことはまゝよあれ位が何であるなぞと自らゆるしたが最後、盃に一杯ほどの奢りが末には大船をも浮べるやうになる、貴公は紳士ぢやによつて例を武士に取つていつて聞かせる話がある、一通りお聞きあれ、とその例話といふは昔或る武士見事な鍔を一枚堀り出したに就いて早速刀屋を呼びにやりこの鍔我等如きには少々奢りぢやけれどこの儘捨て置くも費えぢや、此の脇差へ打ち替へたい、そしてこの鍔にこの緣頭は不相應かと思ふ、然るべく吟味して欲しいと先づ緣頭を奢ることにした、やがて脇差が仕上つて來るとそれを見た人が「この緣頭にこの鮫は不足ではないか奢り給へといふ、乃で今度は鮫を奢つた、元の儘で辛抱が出來るやうに見えたのは目貫であつたが斯う鮫がかはつて見ると殆んど見るに堪えない、乃で目貫を奢る柄廻りが揃ふと最初奢りと思つた鍔が今ではチト不足である、これは先づ我慢もしやう堪忍のならぬは肝腎の魂ぢやと相應の身を吟味してこれも奢つた。それからはいきしといめまでも揃へこれに相應した小柄はないかと方方探し廻つてこれも奢ると又不足がある、脇差に釣合ふ印籠巾着を奢つてこれを帶してこれを提げてこの衣類は大分不似合ぢやと、今度は呉服屋沙汰になる、この袴にこの羽織は不足この小袖はこの帶は不可と、これ等も先づ相應に奢り着かへて差してぶらさげてもこれ迄の朋友一家は段違ひで面白くない、樣々に吟味をして風體相應の交際を奢り、この交際にこの座敷は下作ぢや否それよりも庭廻りが不風雅ぢや、と收入の點も顧みず家屋敷を廣め造作の物好き、扨その末は何うなつたと思ふか本はといへば鍔一枚、次第に奢りに實が入つて終には身代を棒ふり蟲浮き沈みは世の笑ひ草となつた。

本然の性

或る田舍に相應に暮す百姓がありましたが、夫婦の中に男の子が一人のみで可愛さの餘り牛が其の子をなめる樣にして育て上げました、乃でその子が次第に成長するに從つていたづら者になり、馬の尾を拔いたり牛の鼻へ棒をさしたり、近所の子供を泣かしたりして居る内遂に手にあまる不孝者となり、小力はある大酒は飲む賭博をする喧嘩口論の絶へ間なく、偶々親達が異見すると大聲を上げての口答へ「放蕩者だの不孝者だのと其の不孝者には誰れが賴んでして呉れた、夫ほど放蕩者が嫌ならもう少し氣を付けて敎育すればよい、などゝとんでもない口答へ、親達も仕方がなく、自分達は段々年を取るし、今更一人息子を癈嫡も出來ず、といつて氣隨氣儘にさせて

置くといよ〳〵圖にのり始終親類緣者に迷惑計り掛けて居る、箸にも棒にも掛らぬ道樂息子がありました、是は赤子の時からの腕白ものではなかつたのですが、氣隨氣儘が增長して心を取り失つた計りで此の樣である何と放心は恐ろしい事ではございませんか、勿論親類緣者から親達へ癈嫡するようにと、度々催促はするけれども何分一人子の事ゆゑ今日は癈嫡明日は義絶と口ではいへども癈嫡も出來ず、徒に年月が經つて彼の不孝ものが二十六歲になりました、次第に惡業はつのる後後は親類緣者へ何のやうな難義をかけやうやら怖氣が立つたもの故一同に評定して親達へいふてやるには、急に廢嫡さつしやらぬと親類中各各方と義絶を致さねばなりませぬ彼の息子を彼の儘にして置かれると親類は申すに及ばず村中へもどんな難義が掛らうやら知れぬ、御夫婦には恨みはなけれども面々家が大事にござるによつて義絶を願ひませうか廢嫡をさつしやるか有無の返事が聞きたいといつてよこした、乃で親達も詮方つき子故に親類義絶になつては先祖へもすまぬ事さらば今夜皆寄合ひをし

て下され相談の上願書を認めませう、勿論親類中何れも御連印下さらねばならぬ御苦勞ながら印形御待參にて暮早々よりお出下されと返答をされた、扨彼の野良息子は此の日近村で博突を打つて居りました折から村の友達が來て「今夜貴樣を癈嫡すると親類が集合をするとな、何んぼ貴樣のやうなものでも癈嫡せられたら定めて難義をするであらう」と半分聞かずに大聲あげて「何ぢや今夜俺が家で癈嫡の評定か、こいつ面白いことが出來た、全體親父や親母のほえづらが此の頃見ぐるしく氣色が惡くてこたへられたものぢやない、癈嫡受けたら一本立ち南洋へ飛ばうか米國へ宿がへしようか誰も點の打ち人がない、此のやうなあり難い事はないぞ、然らば今夜評定の席へ乘り込んで何んで俺を癈嫡するのぢやと一番團十郎をふんでゆすりかけたら五拾圓や七拾圓の退代は巾着へ入れたやうなものぢや、其の金持つて京か大阪へ出て商賣でもはじめたら面白い事であらう、何卒今夜首尾よく山の當るやうに前いはひに一杯やらう」と同じ仲間の惡友たちと茶碗酒の大酒もり日の暮れ前に

泥のやうに醉ふた所で然らば此の勢に往つて一と勝負はつて來やうと、我が居村へ歸つた時分は丁度初夜前大方今時分は親類共が寄り集りない智慧の底ふるうて評定をして居るであらう、其の所へおどりこんで大あばれにあばれたらば百圓位はつかめるであらうと既に我が家に歸らうとしたが、きつと思案し親類よつて居る中へ俺が顏を見せたらば皆俯いて居るであらう、其の中で大聲あげるも何とやら拍子がない、俺が事を惡しざまにいふて居る其の圖にのり躍り込まぬと座つきが惡い、コイツは一番思案をかへて裏の藪から座敷の椽先へ廻り一家のやつらが評定を立聞きしたら定めて俺があくそもくそを店おろしするであらう、其の拍子に戸障子蹴破り大雷と出かけたら拍子があつて面白いだらうと、獨り思案し雪踏をぬいで腰にはさみ尻引からげて裏の藪から切戸を越え椽先へ廻つて見れば果して內にはひそ〳〵と評定の最中、雨戸の隙からのぞいて見れば親類緣者が車座に直りめん〳〵願書に判を押して居る、其の願書が兩親の前へ來ると彼の息子がこれを見てサア此處が勝

負ちや親父が判を仕やるを合圖に此の戸を蹴破つて飛び込まうと、居合ごしになつて息をつめてのぞいて居る、何と人も恐ろしい心になれば成るものではございませぬか、孟子の――人の生は善なり――と仰せられたるは微塵も違ひはございませんけれども其習ひ性となる時は此のやうな惡黨ものが出來ます、然るに不思議に此の野良息子が惡心を飜して大孝行の人になるといふ、是からが成佛の段でございます。

人の親の心はやみにあらねども
子をおもふ道にまよひぬるかな

彼の親達の前へ勘當の願書が廻つて來ると、母親は大聲をあげて泣き出す、父親は齒もなき齒ぐきをくひしばつて差し俯いて居らるゝ、やがてくもつた聲で婆印形を出してござれ、母親は返事も出かねなく〳〵簞笥の引出しから、革財布に入つた印形を父親の前に置くと彼の野良息子は雨戸の外から息をつめて伺うて居る、其の内

にごて〳〵と財布の紐をとき印形を取り出し肉をつけて既に判を押さうとする時、母親が其の手にすがつて「マア待つて下され」といふ父親は「此の期に及んで親類中が見て居らるゝ未練な事をいはつしやるな」といへども聞かず「マア弘がいふことを聞いて下され、尤あの不孝者に此の家を讓つたら三年經ぬ内に草をはやすでござらう、夫が悲しいといふて天にも地にもたつた一人の子を癈嫡したら跡へ代りを貰はねばならぬ、其の貰つた養子が實體で此方夫婦に孝行をし家も相續して呉れゝば可いけれど何うも慥に養子は孝行だと定まつたこともござるまい、若し其の養子が不心得で家を野原にしようやら、此方等のやうな肩のわるい夫婦なれば其の程も知れぬではござらぬか、同じ子故に潰す身代なら伜の爲めに家を失ひなじんだ村を立退いて夫婦袖乞になるとも、我が子の尻からついて歩いたなら少しは本望に思ひます、五十年此方一生に一度の願ひ何卒聞入れて廢嫡を止めて下され、子故に乞食をすると思へば恨にも思ひませぬ」と聲をあげて泣き〳〵いはるゝ、親類も此を聞

いて一同に顔見合せ親父が何といはるゝぞと守りつめて見て居れば、父親は何思ふたか印形を財布へ入れ手早に財布の紐を締めて彼の願書を親類の前に差し戻し、

「さて〳〵親類一家中へ對して面目ない事でござれども、今婆がいふ所尤に思ひまする故向後伜は廢嫡致しますまい、斯くいへば其の甘い心で育てたもの故あのやうな不孝者が出來たと定めてお前方は笑はつしやらうが、笑はれても苦しうござらぬ勿論あの伜を廢嫡せねば此の家が潰れる事は物の三年持ちはしまい、我が子故に先祖代々の家を野原にするのは、先祖へ對してすまぬといふ事も能く合點して居りまず、又廢嫡せねばお前方と不附合になり、親類義絶も合點でござる、必定此方等が村を立退く時無心合力でもいはうかと其の用心の義絶であらうが必ず案じて下さるな、世間の義理も先祖への不孝も親類の義絶も顧みぬのは子が可愛いばかり、其の子の尻から乞食してついて歩く事なれば此方等夫婦の本望といふもの、決してお前方へ無心合力はいひませぬ、ハテ何で死ぬるも一生じや、可愛い子の爲めに大道に

のたれ死並木の肥料になるのも好んですれば恨みとは存じませぬ程に早々お前方も内へ引取つて下され、翌日から物もいひませぬぞ子故なら何といはれても構ひはござらぬ」

と聞いてこれも嬉し泣きに泣く

親類縁者は餘りの事に呆れ果て返答もせず只夫婦の顔を打ち眺めて居るばかりですが何と親の子に迷ふあはれな心を御推察なされませ、猫が子を喰はへ歩くやうに蔭になり日向になり人の誹りも先祖への義理も我身のつまらぬ行末も構はゝこそ、子の可愛にとられ切つて迷ひに迷うた親の心、實にあはれに氣の毒なものでござります是がこれ此の親達ばかりぢやない世間に子を持つた親の心は皆此の通りである。

此の親の大慈大悲の光明が彼の不孝者の腸へ泌みわたるとあり難いものぢや、さしも恐ろしい鬼のやうな横着ものも忽ち本然の善性に立ち返り五體を締木で締めらるそやうに覺え、何といふ事は知らねども胸さきへ涙が突きかけ聲をあげて泣かれは

せずかます袖を口に喰へて大地に倒れてしめ泣きにないて居る。

圓位上人の歌に

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさになみだこぼるゝ

よくよんだ歌でございます、此の時彼の野良息子が親をかたじけないと思ふたでもない、又あり難いと思ふたでもないだらうが何かは知らず親の慈悲心が腸へこたへると能くしたもので立つても居てもゐられぬ、是れが是れ人々固有の本心といふてあきらかな德を生れついてはゐれどもおのれが氣隨氣儘の身勝手で暫く其の光をかくして居たのぢや、されども親の大慈大悲の光明で腸をつらぬかれ自然と息子の持前の光明がさそはれて輝き出すと氣隨氣儘のむら雲も何處へやら消え失せて眞實心から親の慈悲があり難くなつて來る、格別の惡黨ものが本心に立ちかへると一際すぐれたものである、ナントあり難いものではございませぬか。

扨彼の息子はすぐさま座敷へかけ込み親達へ詫言せんとは思ふたが、まてしばし、此の儘かけ込みたらば親類縁者も驚き如何なる事を仕出すぞと親達もお心づかひであらう、何知らぬ顔にて表口から座敷へ出て親類について詫言せんと、一決して忍び足に裏より表へ廻り、わざと雪駄の音高く咳ばらひと共に座敷へ通れば、親類は大に驚き親達はにくい我子の顔を見て夫婦とも泣いてござると、彼の息子も何にもいはず差し俯いて泣いて居る、稍ありて親類中へ是までは廢嫡と度々聞きましたれどもさのみ辛いとも存じませんだが、今夜の寄合と承りどうした事やらしきりに心細う覺えまする、何分これまでは重々の無調法此の上は屹度改めまするによつて今夜の廢嫡暫く御用捨を下され、永くとは申しましまい僅か三十日の日延其のうちに性根が改まらずば其の時は廢嫡せられても一言も申し分はござらぬ、何卒お前方のお取りなしで親達が三十日日延を致して呉れらるゝやうお詫をなされて下されと何時になく頭を疊へすりつけて賴む。

此の時親類中は親達が手強い返答に其の座しらけて立つにも立たれず拍子のない折から此の息子が一言に、これ幸と一同は口を揃へ今夜の所は待つてやつて下されと詫言する、

親達は本心に立ちかへらないでさへ廢嫡はせぬ心況して今の一言を聞いて只嬉し泣きに泣いてゐらるゝ。

親類達もこれをしほに隨分孝行にさつしやれといひ捨てゝ其の夜の評定はおぢやんとなりました。

是から彼の息子殿が手の裏を反すやうに孝行な人になり、兩親に事ふる有樣實に小兒の父母を慕ふが如く、是までの惡行は跡方もなく消え失せました。此の事漸く世間に取沙汰が高くなり半年もたゝぬ内に郡長のお耳に入り遂に縣廳より内務省に申請されて表彰されましたと。是で彼の息子の孝行の仕業御推察なされたし、さて其の後三年ばかり經て母親が大病末期に彼の息子殿を枕元に呼んでいはるゝには、何

時ぞや廢嫡の評定の節より何と思ふたか志が改り此の上もなう孝行をして呉れる、若しその時にそなたの心が改まらず其の中に母が死んだならば地獄へ行くより外はない、今はそちが孝行をして呉れるから何も思ふことがない故、今死んだら極樂へ行くに違ひはない、さすれば母を佛にして呉れるは皆其方が孝行の故ぢやと手を合せて拜みながら臨終せられたと申すことである。

積善積富

賣卜先生何時になく閑でゐると客がやつて來て「先生にはおひ〳〵の觀相人御苦勞千萬に存じまする、就きましては昔から金の生る木が欲しいなぞと申しますが、其の拵へやうの御傳授がありましたら何卒お授けに預りたいものでございます……」と賴む。

「隨分々々我が心相の植ゑ所によつて金の生る木も貧の生る木も吉の生る木も凶の生る木も善の生る木も惡の生る木も出來る古歌に

植ゑて見よ花の育たぬ里もなし
心からこそ身はいやしけれ

とあつて兎角心の置き所ぢや」

今は昔或る里に變木屋といふ植木屋があつた、世に珍らしい人の知らない奇妙奇天烈の植木を持つて居たが或る富豪の某遠方への土產に何か買つて行かうとそれへ立ち寄つた所、流石は變木屋だけあつて家も主人も普通とは變つてゐる、ずつと入つて「何か珍らしい木があつたら見せて貰ひたいチト遠方へ土產にするのだ」といへば

「はい〳〵」と主人が立つて出で

「手前どもには珍らしくない木とては一本もござりませぬ、先づその木を御覽下さ

れ」

「はゝあこれは〳〵如何にも珍らしい、して何といふ木かな」

「その木は幹が牡丹でその牡丹から楠が出て楠の枝から罌粟の花が咲いて罌粟の花から松の木となり松の木から稻となり稻の穗から櫻となり櫻の枝からさぼてんが出來さぼてんから杉の木となりその杉の葉から朝顏の蔓が出來朝顏の花から松茸が出來松茸の笠から南瓜となり南瓜からずつと伸び出るのが藤の花藤の蔓から桐の木が出來て桐の木から麥となるのでございます、何と珍らしいではありませんか」としたり顏にいふ、某は驚いて

「さて〳〵珍らしい木である、然し拙者が土產に遣はしたいのは學者雅人風流人への土產、だからそれに適當なのが欲しいね」

「成程それならばあのずつと花の伸びた木が宜しいでございませう」某はつく〴〵見て

「成程花が伸びてゐる何といふ木かな」

「あれは慢木と申しまする、學者や風流人へはこの高慢の木があたりまへでございます」

某は目を移して「あの賑かに見えるのは丶」

「あれは若い人たちの好きまする木で若い人には好い土産でございます」

「あの木から何が出るな」

「あの木は元が酒木でその酒木から遊び木が出て遊び木から色木となり色木から騒木となりその騒木から難木となり又節木となつてめつ木しやく木となり終には親の勘木となりこの勘木から仕方な木に至るのでございます、勘當の花の木はこれでございますが何とお望みはございませんか」某は首を傾けて更に

「あの向ふに根の歪み捻れた木がある何うも面白い枝振りだがあの木からは何が出ます」

「あれでございますか、あれは老若男女誰でも好む木で名を慾木と申します、それ故自然捻れ歪んで居ります、してあの捻木からずつと出るのが望み木で望み木から勝負木相塡木が出て剛木ともなれば惡木ともなり終には損木難木となります、世に貧乏の花が咲くと申すのはこの木でございます、唯今專ら流行る木でございますが何とお求めにはなりませんか」「否拙者の望むのは女子共への好い進物になるのが欲しい」「それならば向ふの小さい木は如何で……」「何といふ木か」

「お女中方への御進物ならば高きも卑きも先づあれが宜しからうと存じます」

「あの木から何が出るな」

「あの小さい木から出るのが恪氣でございます、その恪氣から鬱木が出て鬱木から癖木が出て、短木ともなります、それから續いて狂木亂木となり歸り木も出れば去る木も出ます、お女中方への土産には此の木が一番でございましよう」「然うかしらして此の恪木からは何んな花が咲くかな」

「はい恪氣に花はないもの、けれど存外實の入るものでございます」「その實は何んな實だらうか」「左樣さまあ恰度燒餅のやうな實が出來ます」「それは面白い此の恪氣を育てるには朝夕施肥をせねばならぬか或は平素水でもかけるのか」

「否々それには及びませぬ、唯朝夕寄つて集つつ焚きつけさへすれば自然と茂つて喧しくはびこります、兎角今の世の中には此の恪氣や慾木や酒木や色木や高慢の木が繁昌します、して何處にもない所はございません、貴方も難かしく吟味を遊ばさずに此の木をお買ひなされませ、至つて育て易くて賴まずとも人が來て榮えはびこらして呉れますから大抵にして此の邊にお決めなされませ」と勸めるのを

「成程何れも面白い木ではあるが今少し變つたのがあつたらそれを見せて貰ひたい」といふと變木屋は「いや貴方は御註文が難かしいこれ等と變つた木と申せば一屋土地違ひの木をお目にかけませう」と斯ういつて餘程隔つた奥庭へ連れ行き、

「この木は今の木とは大違ひ全くの別物でございます、篤と御覽下されませ」といふ。

某はつくづく打ち眺めて、

「さて〳〵この木は根から幹から眞直で少しも歪まず素直に長い木だ何といふ木だらう」

「この木は何處までも眞直で少しも歪むことがございません、で名を正直木と申します」

「成程々々してこの木から何が出ます」

「はい此の正直木からずつと出ますのが實木に德木、その實木德木から忠木も出れば孝行木も出ます、この忠木孝行木から出るのが仁木禮木で仁木禮木に咲く花が御覽なさいあの富貴の花でございます、何と見事ではございませんか、あの富木の花は四季共に落ちず凋まず衰へもしませんから又の名を長命木とも常盤木とも申します、世にも盛んなそして美しくめでたい木ではございませんか」といへば、

某は感じ入つて

「これは又格別だ拙者はこの木が求めたい」といへば主人は大に笑つて、

「誰でもこの木を望みますが買つて歸つては迷惑して戻しに來たり枯してしまつたり致します」「何うした譯だらう」

「畢竟至つて育てやうが難かしいのでございます、酒を飲み過せば枯れる、色を貪れば枯れる、慾が深ければ損じる、物に腹立ち短氣なれば枯れる、家業を怠れば損じてしまふ、驕りやぶさかなれば枯れる、恪氣をして枯れる、不忠不孝は又格別根から葉からまるで失くなつてしまふといふわけで容易のことでは育ちません無駄なことでございます」と忠告顏

いはれて見ると尙ほ欲しい。

「否々及ばずながら拙者深く愼んで屹度この木を育て上げて見せる、是非賣つて貰ひたい價は何程だ一貫文では賣れないか」といふと、

主人はかぶりをふつて、

「何う致しまして、今日廉い錢の一貫や二貫で差し上げられる品ではございません昔値のよい孔子の時分の一貫なら兎に角、今の錢では到底々々……」「ぢや 何程ぢや」

「然やうさ此の富木長命木がお望みなら善を山程積んでお持ちなされませ」と答へられたとか「まことに富貴長命が望みなら善を山程積むべきことであります」

古人も

積善の家には餘慶あり

と申されました。

7.39.27

諸人安樂傳授所

賣卜先生何かな變つた可い商賣はないかと熟々思案の末、一日店先に看板を出して墨黒々と諸人安樂傳授所と大書し往來の人に知らせておくと、慾に目のない人々が我も〳〵とやつて來て傳授を願ふその中に、先づ一番に進み出たのは破れ衣のなまぐさ坊主

我慢の錫杖振り立て振り立て、

「やれ〳〵先生聞いて下せえ我等が事は御存じの門々に立つなまぐさなるが、時節が惡くて何處も彼處も呉れ人がない故、着たる衣の破れ被れと度胸を据ゑても然ながら坊主の盗みもならず、朝から晩まで錫杖のぢやら〳〵いふて歩けども一ッの口さへ得塞がらぬは銅羅伽如來にも見放されたかと實以て悲しく存じます、我等の如

く資本いらずにたゝ貰ふてさへ引き合はぬとはよく〳〵惡い世界になつたと見えまする、斯やうな切ない世界へ生れ出ましても安樂を得る御傳授がおありとならば何卒教へてくださいませ」

傳授先生は可笑しさにくつ〳〵笑つて、

「只貰つてさへ引き合はぬとは成程難かしい時節と見える。して汝の心に望み通りの世界と思ふのは一體何んな世界か少しも包まず有體にいつて見よ」

「さやうさ我等が望み通りの世界と申すは、何か一度話すと錢の矢先雨や霰と五十錢一圓が降つて來る、鬼神のやうな親父でも酒を飲まんか飯を食んかと進めて呉れる、色も能く利き慾と得とは望みの儘、主人や親を自由に廻し、氣に入らない七面倒な奴原は片つ端から張り殺してもお咎めのない世界だつたらこれに過ぎたあり難い世界は先づあるまいかと存じます」と先生は頷いて、

「うむ解つたそれならばずつと前へ進め今汝のいつた望み通りの世界にして呉れや

う」といへばなまぐさ坊主は大喜びにて翁の前へ進み寄る、すると翁は突然坊主の頷頸を取つて力まかせに締め上げてあはや締め殺さうとする、坊主は吃驚その手をおさへて、

「あゝ先生何だつて私をお殺しなさるのぢや御免なさい命だけは何卒お助けなすつて……」

先生は大立腹にて、

「俺は汝を苦しめるのぢやない、汝の願ひの望みの儘の世界にしてやるのぢや、汝は今自分の氣に入らぬ奴原は勝手次第に殺してもお咎めのない世界ならそれこそ結構な世界ぢやと現に明言した記憶があらう、汝のやうな畜生は俺の氣には入らぬのぢやそれ故勝手に殺して呉れる、これ卽ち汝の望みの世界になつたわけで何も嘆くことはない喜んで往生しろ」

なまぐさ坊主は涙を流して、

「先生お恕し下され、私が了簡違ひ善く解りました、自分が人を殺すこと勝手次第の世界なら人も亦自分を殺すこと勝手次第、自分が主人や親を自由に廻せる世界なら、自分の子や奉公人も自分を辛くするは必定、自分が盗みをしてもお構ひのない世界なら人も勝手に自分の物を盗んで行つて少しも油斷は出來ませぬ、高枕はさて措き石枕もならぬ難儀な世界で、我等のやうな士農工商を外れた何にも彼にも生醉ひの酒より外の藝なし坊主は、生かして置くものはあるまいに、あり難い結構な今の御代に生れ出て、口さへ動かせば命は繋がれるものを、その自由さにつけあがり不足が出てのこの仕合せ今の今までこの世界を惡い世界と苦しみましたが、只今先生の手早い御教訓によつて忽ちこゝが楽樂世界充分足ることを知りました、先生のお教へ安樂の御傳授は篤と合點が參りました」といふ乃で翁は坊主を突き飛ばして

「汝に限らずすべて世界の人は、あり難い御代に生れて飢ゑず凍えず世を渡る結構の餘り、種々の不足を起し己れ一人を利さうとして思ひに任せぬ勝手に合はぬと時

節を怨んだり人を咎がめたりして身を苦しめる愚かなものぢや、この苦しみは損か得か己れの身の程々を顧み、足ることを知らなければ何時になつても安樂に至り得るものではない」

と懇々の説法さて一つの寓話を説き聞かせる。昔太く逞しい一匹の馬があつた或る時牛に向つて、

「何卒貴公の角を貸して呉れ」といふ牛は答へて「何うするのぢや」といへば、

「貴公もかね〳〵御存じの通り拙者には日に千里を走る術があるけれど、悲しいかな貴公のやうな角のない爲めに何時までも卑しい馬で世を渡ること實以て殘念至極拙者が貴公の角を借り受けたものならそれこそ天下無敵の獸で日本は勿論唐天竺にも駈け渡り獅子麒麟をも配下につけて遍ねく猛威を振ふこと期して待つべしぢや、拙者が獸の大王となつた曉は貴公を引き上げて關白にして進せるから是非々々角を貸して呉れ」と鼻息荒くいふ、牛は驚いて、

「否々夫は宜しくない、馬は馬牛は牛らしくしてゐるが所謂天命を得たもので長久安樂の基この外にはない、貴公の如く足ることを知らず法外の望みを起して己れの位がその分限に違へば身の破滅を招くに止まるその考へは見合した方が可からう」と懇々異見をしたが馬はいつかな聞き入れず無理に角を借り受けると勢ひ猛く駈け出した、所が世間の人はそれを見て、

「さて〳〵珍らしい馬ではないか、牛の角を戴いた所は何よりの見世物ぢや」

といつて寄つて集つてこれを生捕り見世物小屋に繫いでしまつた、あはれ獸界の主たるべく望んだ馬は斯くして旦暮人の見世物に曝され大きな辱めを受けつゝ一生を見せ物じまいに終つたとのこと。

翁は右の話をして、馬は生れの儘の馬でゐたなら馬の德を失はなかつたのぢや、よしない不足を起して法外の望みに一生を誤つたのは何と悲しいことではないか。ぢやがこれは馬のみのことではない、萬事がすべてこの道理で己れの分に違ひ不平を

起せば必ずこの身を失つてしまふ、世の中に身を失ふ程の苦しみはあるまい。翁が傳授の安樂としても他に仕方のあるのぢやない、牛は牛馬は馬、柳は緑、花は易ら
ぬ紅で、何時も己れの位に素してちよんがれ坊はちよんがれ可くちよぼくれいつて
稼ぐばかり安樂といふ秘事も傳授もやれ〳〵ないよ。

安樂の傳授といふも外ならず
たゝ足ることを知るまでのこと
こと足れば足るにまかせて事足らす
足らで事足る身こそやすけれ

これが天分を守るといふて貴賤貧富を問はず各々天の與へたる分限に從つて己れの務を完全に行ふべきである。

心の洗濯

昔江戸神田邊に至つての貧乏人夫婦の中に、子供が三人亭主は三十四五女房は二十八九家は九尺二間の裏店で鼠の巣を見るやうな住居、商賣は何と取り定めたことはなく、明けても暮れても一合酒に夫婦喧嘩小博突が商賣同然、朝は朝寢し夜は夜更し針を藏につんだとて到底たまつたものではない、結句貧乏のどんぞこへ落ちて詮方なしに青物賣りと出かけ、四五百文の錢で親子五人がその日暮しといふことになつた。先づ朝市で五百文が大根を買つてその日一日「大根大根……」と江戸中を泣き歩き、夕刻七百文ばかりにして家に歸ると米買へ醤油買へ油買へ薪買へ子供の鼻ぐすりに至るまで二百文の錢が明日一日の軍用金になり、殘つた五百文は卽ち明日の商賣の

資本である、一日休むと一日食はずに居なければならぬ、實に小忙はしい身代であるが、其中からも無理無體に「雨が降るから……」といつては半日休んで博突を打ち、

「少し頭痛がする……」といつては正午から歸つて夫婦喧嘩をやらかす、親子五人が食はずに居ることも折々であつたといふ。

こんな話は若いものや子供たちも能く聞いて置くがよい、是は是小さい時親のいふことを聞かなかつた報い成長の後斯く罰があたつて難儀な目を見るのである、親の言葉は隨分愼しんで聞かなければならぬ。

一日彼の大根賣りが例の通り一荷の大根を肩にして朝早くから賣り歩いた所が何うしたことやらその日はたゞの一把も賣れない、日ざしを見れば最早正午過ぎ腹の時計は八つ下り財布の中にはまだ一文の錢もたまらない。

これは困つたこの大根が日沒までに七百文の錢に化けないと忽ち明日は釜の中に蜘

蛛の巣が張る、さて何うしたら可からうか。

と思安に呉れながら兩國橋を渡り本所の屋敷町を「大根々々……」と賣つて歩いた斯くて或る屋敷の前を通ると裏長屋の窓の中から、

「おい大根屋……」と呼ぶやれ嬉しや知行にありついたと「はい……」と見ると門から右へ三つ目の窓である、乃で門を入つて長屋に廻つて見ると正に三軒目高塀の内戸口には何の某と標札が打つてある、荷を持ち込むと椽先の障子が開く、主人の侍は今月代を剃つた所と見えて鏡立てを前に自身髪を結びながら「その大根は何程ぢや」といふ「はい百に三把でございます」

「それは高い二十四文づゝにして置け」

と値切る大根賣りは賣りたいには賣りたいけれどそれでは現に損が立つ、

「何卒三把にお買ひなすつて、實は今朝から江戸中を泣き歩いてまだ一把も賣りません、何うしても賣つて歸らなければならない、大根で一切かけ値は申しません」と

いふ彼の侍はかぶりをふつて「否まからずば止しにしやう止むを得ぬ持つて歸つて呉れ」といひ捨ててはたと障子をしめてしまつた、大根賣りはその障子の外から尙ほいろ〳〵といつて見たが主人はとんと相手にならない、こゝに至つて大に當惑した仕樣模樣もない「はて何うしやうかしら」と手を組んで思案しながら不圖目についたのは椽側の銅盥である「此處が大事の聞きどころである、心の關所が油斷なく番をしてゐたら銅盥は目につかない筈である、孔子の言葉に――小人窮すればこゝに濫す――とこれは大根賣りのみの事ではない、誰の身の上にもこれに似たことがある」

彼の大根賣り椽先の障子はしめてある、あたりに見る人はない、獨り心にうなづきつゝ水の入つた、銅盥をその儘そつと大根の下へ隱した、恐ろしいものである。今まで廣かつた世界が立ちどころに狹くなつて五尺の體を暫くも置くことが出來ぬ、大急ぎで荷を擔ぎ出して門口を出やうとすると突然障子の中から、

「こりや大根屋……」と呼ぶ。

大根賣りはぎよつとしながらも拔からぬ顏で、

「まかりませぬ」といふ。

「いや〳〵ねぎりはせぬその大根買つて置かう」といひざまさつと障子を開けた。

大根賣りはいよ〳〵以て驚いたが何とかして逃げたいものと「何程お入用ですかはした賣りは出來かねますので」

「いや〳〵皆な買ふのぢやその椽先へならべて呉れ」といふ。

サア大根賣りも一生懸命障子のしまつて居る間なら銅盥の出しやうもあらうが今更に出されるものではない、といつて賣らぬともいはれず逃げるには荷物がある百千萬の後悔も今となつては間に合はない。うろ〳〵して居ると侍は大根賣りの顏をきつと見て、

「汝はひど〳〵うろたへて居るぞよ、先づ銅盥から出して大根を數へて見よ」

大根賣りは總身に冷汗を流してもう斬られるかもう打たれるかとわな〳〵ふるへながら恥かしさうにそつと銅盥を取り出し地に手を突いて「旦那樣御免なすつて下さいまし、何を隱しませう先刻も申します通り今朝からまだ一文の商ひも致しませずこの儘歸りますと明日一日親子五人が食べることが出來ません、七つを頭に子供が三人何卒親子五人の命をお助けなすつて下さいまし」と色は靑ざめ土に頭をすりつけて只管詫び入る、すると彼の侍思ひの外氣立ての好い人で更に立腹の氣色も見せず、

「いや〳〵その詫言には及ばぬ大根の數を讀んで見よ」とのこと恐々ながら椽側へ大根を積みあげた所正に二十三把侍は七百六十七文の錢を取り出して、

「其方のいふ通り二十三把が七百六十七文序に銅盥を添へて遣はす、貧の盜みとはいひながら汝の根性は餘程汚れて居ると見える、此の銅盥は顏を洗ふ道具であるがたゝ顏や手足を洗ふばかりではあるまい、心の洗ひやうもありさうなものぢや、無禮

は咎めぬこの銅盥を持つて歸つて篤と思案せよ、そして心の垢を洗ひ落せ」といひ捨てゝはたと障子をしめて內へ入つた。

大根賣りは夢を見たやうである、あり難いやら恥かしいやら禮もいはれず詮方なさに銅盥と錢とを荷の中へ入れて早々彼の屋敷を逃げ出し初めて生きた心地になつたが何分恥かしいといふ心が腹の中に横たはつてゐるのでうつ〳〵と元氣なく家へ歸つた。

此の大根賣り常ならば小唄を歌ひながら門口に入ると荷籠を投げ捨てゝ財布片手に先づ明日の手配りである「米が百文薪が二十四文油が十六文……」と呼びあげて尙ほ又子供の鼻藥から今夜の寢酒の肴まで殘る所なくしたり顏に差圖する所であるが今日は何時になく門口をそつと入り、しほ〳〵と上り口に腰をかけたまゝ草鞋の紐を解かうともせず、物をもいはずじつと差し俯向いて居る、女房は櫛卷き頭に赤兒を懷にねぢ込んで一調子張り上げて、

「賣上げも見せず恐れ入つた狐のやうに俯向いてお前居睡つてゐるのかい、但しは食ひ酔つて歸つたのかえ、見たくもないこけ博奕だらう」との御託宣を上げて見ても一言の返辭もない、女房はとんと合點が行かぬ荷の中を見ると賣上げの錢もその儘外に見慣れぬ銅盥がある。

「これお前その銅盥は何處から持つて來たの家には不似合な品だ、顏つきといひ銅盥といひこれには譯がありさうだね」とまくしかけて問ひ詰める、乃で亭主は今日のいちぶしじふを話し「さて〳〵お前の手前も面目ない」

としみ〳〵夢がさめて來た。これがこれあり難いものである、心を洗へといつた彼の侍の一言が大根賣りの腹に横たはつたからである。

それといふのは孟子の所謂、

羞惡の心は義の端なり

といふて此の恥づかしいと思ふのは本心の發見である、恥をさへ忘れなければ人の

身は立つて行く、惡くすると恥を恥と思はないものがある。畢竟心が汚れ切つて例へば曇つた鏡に影のうつらなやうなものである、幸にこの大根賣りはよい侍に出遇ひあり難い御異見にあづかつたので本心に立ち戻ることが出來た。何故とならば彼の大根賣りが若しこの時に銅盥を盜み終せたら何うか、次第に盜みが面白くなつて初めは恐ろしいと思つたのが後には却つて快くなる、盜人も新米の間は自分の足音にも驚いたのがだん〳〵膽太くなつて石で戸を叩き割つてでも入るやうになる、丁度鳴子に驚く雀が後には鳴子に馴れてこれに止まるやうになるのと同じである所謂――習ひ性となる――ものでよい加減に目を覺まさないと一生廢りものになつてしまふ。彼の大根賣りも惡くすると後には大盜人になつて首の座に直つたかも知れぬ。幸ひなるかな侍の異見の聲が耳へ入つて立ち戻りが出來た、さすれば最早首を斬られる心配はない侍は正しく觀音樣である。

扨彼の大根賣りは爾來夫嫌心を協せ本心になつて夜晝働いた甲斐に三年目には相應

の八百屋になつた、乃で彼の銅盥を返し厚き禮を述べて其のお屋敷のお出入りになつたとのこと、是ぞ是舊染の汚れを洗濯したといふものである。

持つ人の心によりて瓦とも
ともなるは黄金なりけり

萬相談所

まだ若い〳〵と思つて居るうち何時しか白髮の頭となつた、この先生智慧はなくとも口はある、仙人ならぬ身の霞を喰つて生きても居られず、といつて他に藝はなし、何とか渡世の道もがなと種々思案の末萬相談所といふ看板を出して緣のとれた火鉢の角を撫でながらぼろ机の前に座せる翁があつた、或日五十ばかりの親仁少し禿頭を撫でながら何卒お賴み申します、學問の儀に就きまして少々御相談願ひたく存じます……と翁は皆まで聞かず何學問の儀とかそれは感心だ、貴公は最早かなりの年輩らしいが今から學問とは感心致す、一體我國では五十にもなると老耄して隱居するとかいふ早老者が多いが八十の手習ひといへばお笑ひ草のやうだが又支那人の諺には

「學問に遲き時なし」

ともあつて昔から晩學で業を成した人は日本にも支那にも西洋にも數多その例があるが――志ある者は事竟に成る――といつて成る成らぬは志の如何にあることで年齡には關係しない、西洋人は貴公位の年輩ではまだ青年である」と所謂懸河の辯で滔々と述べ立てゝ客には口を開かせない程である。

客はアツケにとられて先生御相談を願ふと申すのは私の事ではございません伜の事なのでございます、翁はさうかさうか伜といへば息子だな息子が何か放蕩でもするといふのか、廓通ひか藝者買ひか茶屋酒の毒にあたつて骨の腐りかゝつた病人なら何のやうな名醫でも匙を投げる。若いものゝ無分別には何處の親でも泣かされるのう……」これは驚いたと小聲でいつて、先生々々マア〳〵一通りお聞き下され、手

前は質屋渡世を致して居りますが朝から晩までがみ〳〵いつても女房も伜も番頭も手代も小僧や飯焚きに至るまでトンといふことを聞きませぬ、殊にたつた一人の伜今年取つて十九歳で來る三月には中學校を卒業することになつて居るのでございますが、いやはや困つた奴で手前了簡には學問はこれ限りとして家業を見習はせたく思ひますけれども伜は更に高等學校から大學へ入りたいと申します、何といひましても馬の耳に念佛で不心得極まる奴で思へば思へば涙がこぼれます、何うかこの不心得を飜させる手段はありますまいか、

「翁はハハアそれは不心得だ不心得だ貴公が不心得だ」「へへイこれは〳〵手前が不心得驚木桃の木山椒の木何で手前が不心得でございます」と不思議の體にいふ。

「翁はハッハッヽヽヽそんなにむきにならないでもよいマア貴公に聞かう學問したいといふ息子が何で不心得であるか」

「不心得ですとも學問が大事か家業が大事かチトお考下され、質屋をして居れば品

物を取つて金を貸してあぶなげのない營業でその利益はと申せば少くも年に五千兩にはなります、大學を卒業して學士になつた所で文學士などは掃きよせる程あつて四十か五十の月給取りで詰らないではありませぬか、大枚の學資を費つてはした月給取りにならうなぞとは不心得ではありませんか、もう御相談を願ひますまい」と大に激昂して疊をけつて歸らうとする、

「翁はアヽこれ待たつしやれ今逃げられては三文にもならない開店早々緣起がわるい、だが質屋さん全體學問は何の爲めにするのでありませうか」

そりや知れたこと金儲けの爲めではございませんかといふ。

「翁は憫むべし憫むべし孔子孟子を初めとし古今東西の學者達が寢食を忘れてなされた學問を貴公は唯金儲けの道具と見て居らるゝは眞に憫むべきことである、學問はそんな下等なものではないぞ」「では何の爲めの學問で……」と不審顏をすると

「何の爲といつて一口に述べられぬがマア人間の味の素である……へゝえ判りませ

んね。

「翁はすべて木に生る果物の中には色はよくても味のわるいのがある、烏瓜や澁柿は見た所は眞赤に色づいて旨さうに見えるが、喰つて見ると旨いどころか吐き出さなければならぬが、色はわるくても味のよいものがある、人間もその通りで頭ばかり蜻蛉のやうに光らせて上から下まで柔か物づくめ、手には金の指輪、腰には金時計わるくもない、目に金縁眼鏡をかけて意氣揚々と自働車にて駈け廻る所は立派な紳士であるがその紳士と膝突き合せて話して見ると頭の中はがらん堂、人生問題や宗教や哲學のことになるとちんぷんかんぷんであるが、それでも多くは才ありておべつかや駈引には馴れたもの金儲けには抜目がない、何かといへば世の中は金のことでござるといふ、西洋のゐる坊さんは「予は富んで無識ならんよりは寧豚たらんと欲す」といつたが今の世の中にはこの豚仲間が多い、色のみよくて味のない澁柿の類、名は烏瓜でも烏も滅多に突つゝきはせぬ、のう質屋さん貴公もこの豚仲間ぢ

やないかな、それとも澁柿か烏瓜か大方外れはしまい」と客は僻易の體…「然し先生金がなくては一日も暮されませぬ」「金がなくては暮されぬがチト慾を制するのである」「慾を制して日本中の人が貧乏に甘んじた日には我國も東洋の覇權を握られませぬ、國の爲め世の爲めに大に金を儲ける心要はありますまいか、

「翁はソレそこだと大に力を入れて金の價値は散ずるにあり、費ひ途を知つてのこならば金儲けもするがよい、國家の爲め社會の爲めを計るといふことなら百億萬圓の金儲けも決して多きに過ぎるといはぬ、金は儲けるより費ふことが難かしい…

「然うではありますまい……否難かしい世間を見ても解るではないか、彼の世渡り上手な人は盛んに金儲けをする、近年は船成金とか戰爭成金とかいふ奴が澤山出來た、或連中は儲けた金を何う費ふか、一身の榮華を極め別莊を建てる妾を圍ふ酒池肉林の快を貪る外世の爲め人の爲めに何をするか大方は前にいつた豚仲間である、色のみよくて味のない烏瓜ぢや澁柿ぢやによつて吝嗇漢一に稱して澁柿といふ

のである、皆これ費ひ途を知らぬのである、これ等の輩を戒めて、

照憲皇太后の御詠に

持つ人の心によりて瓦とも
玉ともなるは黄金なりけり

と仰せられてあります。

乃で費ひ途を知るには學問をしなければならぬ、昔柳下惠は水飴を製して根氣を養ひ文盜跖は水飴を敷居に流して盜みの方便にした、同じ水飴でも人の善惡によつて用ゐ方が違ふ、金もこれと同然で賢き人は賢く費ひ、下卑た人は下卑て費ふ恐ろしいものである。孔子は――用を節して人を愛す――といつて居る、金を儲けて儉約に費つて餘りの金で世の爲め人の爲めにせよとの仰せで畢竟金の費ひ途をお示しなされたのである。

翁が最前金儲けをけなしたのは豚仲間の金儲けをけなしたのであるから其の積りでな。

「ハイ解りました」「解つたら息子の望みに任せて學問させるのだ學士になるのは四十や五十の月給取りが目的ではない、質屋渡世は其の上でも結構出來る」

「あり難う存じます、伜も嘸喜ぶでありませう」と客は頭を下げて、

「しますると學問は人間の味の素でそれから金の費ひ途を敎へるものと斯やうの仰せでございますか」

否々學問の效能は廣大無邊で一々擧ぐるに遑なしで今話したのは手近な一つ二つに過ぎぬ、尙ほ學問には專門的と一般的とがある、翁が今學問學問といつたのは一般的の方で卽ち心の學問である。人としての學問である。古歌に

人多き人の中にも人ぞなき
人となれ人人となせ人

とあつて少いやうで多いのが借金多いやうで少いのが財産とそれからこの人である

人が少いといふに就いて面白い話がある。昔希臘の大哲學者ダイオゼニスといふ人が日中にカンテラを提げてアゼンの町の一番繁華な所を歩いて居ると「先生何をして居なさる」といふ者がある「私は人間をさがして居るのぢや」

「人間ですつて……人間はこんなに大勢居るではありませんか」と不思議がると、ダイオゼニスは「人間集れつ」と怒鳴つた。

往來の人は驚いてダイオゼニスの周圍へドヤドヤと集つて來る……するとダイオゼニスは貴樣達が人間かい「糞ぢや糞ぢや馬の糞ぢや」と叫びながら棒を振り廻して追ひ散らしてしまつたとか、世間に人の少いことは此の話でもわかる。目が横について鼻が縦について二本の手と二本の足をそなへてよくしやべるものが必ずしも人ではない、人は人らしい人でなくてはならぬ。畢竟人の人たる所以は心にあるのでそれには人としての學問所謂一般的の學問をすることが肝腎ぢや。

客は合點が行つたといふやうに「成程々々」

「翁は何程ごうつくばりの貴公も學問の大切な事はほゝ解つたであらう、貴公より息子の方が確にえらいぞ。

「然し先生金が澤山あつて立派な服裝をして金時計でもぶらさげて居れば自然人があがめて呉れます、又えらさうにも見えるではございませんか」といへば、

翁は馬鹿な事をいひなさると叱りつけて、崇めるのは何んな人ぢや、貴公は子供にやんやといはれて嬉しいか、子供にほめられて喜ぶものは體の大きな子供ぢや。昔一休和尚といふ高僧があつたな、客存じて居ります、まだ小僧のころ元來何んとか彼んとか愚僧に喰はれて糞となれかあつと怒鳴つて池の鯉を食べられた方で……貴公は中々物識りぢやと笑つて足利氏の末京は北野の大德寺の一休和尚といへば當時世に聞えた高僧であるが、其の一休の許へ或る金持ちから年忌の回向に來て呉れとの依頼、和尚は宜しいといつて引受けて後刻金持ちの家へ行つて其の店先に立つと客を相手に算盤をパチ〳〵やつて居た番頭が何だい又奉加帳でも持つて來たのかい

だめだ〳〵今日はこの通り忙がしいのだからお歸りトットとお歸りとまるで乞食扱ひである、無理はない破れ法衣に千切れた下駄、そのみすぼらしさは誰が目にも大德寺のお知識とは見受けられぬ、和尚は左樣かとばかり寺へ歸つて今度は金襴の袈裟美々しく着飾つて行つた、番頭はア、和尚さまでございまするか、今日は御大儀千萬に存じ奉りまする、何卒此方へ……と滅多矢鱈に頭を下げる、それへ主人夫婦が立つて出て奥へ案内し下にも置かないもてなしぶりである、一休和尚は笑止千萬に心得て「最前愚僧が見苦しい服裝をして來たら乞食を扱ふやうにトットと歸れなぞと怒鳴らつしやつたが今金襴の袈裟を着飾つて來るとちやほやさつしやる、して見るとお前方は此の一休よりも金襴の袈裟があり難いだらう、それならこれを拜ましやれ……」といつて着て居る袈裟をぬぎ佛壇の前へ投げ出して置いて愚僧は歸るよサヨナラとばかりどん〳〵歸つてしまつたといふ。

この話で篤と考へるがよい、服裝をあり難がる者あり、あり難がられて喜ぶ者は今

の世にも澤山ある、皆金持ちの一類ぢや、人間の問題は金以上貴いもつと大きいものがある、畢竟心の問題ぢや、此の心を立派にして人らしい人となり人らしい仕事をするのでなければならぬ、それには學問が必要ぢや一般的の學問心の學問人としての學問これが大切ぢや、息子が學問が好きなら學問をさせるがよい貴樣も學問をするがよい」

「先生人の道が知れたら金儲けがいやになりは致しませぬか」と飛んだ心配する、人の道を知つてそれでいやになるやうな金儲けなら初めからせぬがよい、畢竟道にそむくからだ、道に據つて金を儲け道に據つて金を費ふこれでなければならぬ。斯うして儲ける金ならば拾萬兩百萬兩千萬兩何程金を儲けてもよい、世界中の金を一手に集めても結句世界の爲めになる、世間を忘れ人を忘れて一身一家の事ばかりに頓着する金儲けは眞つ平〳〵。

「では伜には學問をさせて手前は心學をやりませう御懇なるおさとしあり難う存じ

まする……」と三拜九拜して客は翁の前をさがると「おつと質屋さんお禮は其方の志次第ぢや」はい三貫五兩の質の二ケ月分の利子で御座います。

福相なる傳授

人の貧富の境界は我が人相の善惡により、その人相の善惡は我が心相の善惡に順ふものである。故に貧相を福相に致すの傳授はいと易き事である。昔或所に貧相を福相と轉じ富貴となすの傳授といふ看板を出して此の傳授料百両也と書いて行き來の人に見せしかば誰も彼も是を見て此の傳授を願ひたく望めども百兩に迷惑し行く人もあらざりしに町人に福尾溜助といふ男彼の家に行きて百兩の金を出し貧相を福相となすの傳授を許し給へと希ふ。

主人の翁異人にて白髮に鶴氅を着し溜助に向つて、

「扨其許には未だ若年なるに能く奇特にも來り給ふた、速に傳授を致しても可いけれどもそれでは却つてお爲めにならぬから今日より身心共に穩かに清淨にして七日が間相愼み來り給へ」といふ。

溜助尤と喜び家に歸つてよく〳〵七日相愼み八日目の朝早天に翁の家に行つて案内を乞へば美面いやしからぬ女兩人出でゝ客の間へ通し、

「唯今主人は他行にて程なくお歸りになります、暫くお待ち給はるべし」とて四方山の話もいとしとやかにおくゆかしくも思はるゝに又次の襖をあけて「其處は端近でありますから此の間へ入らせ給へよ」と禮義正しく手を突きて挨拶する婦人を見れば其の美麗なる事魂をけしおもはゆげに會釋すれば彼の婦人「是非に是へ入らせ給へ」と手を取りて席にすゝめ女三人取りかこみて申すには「此家の主人は老人と申し殊に至つて惡堅くるしき氣質で私共が朝夕心をのばしまする時もござりませぬ

が今日幸に主人の留守に君來り給ふぞ世に比類なき喜びである」とて美酒佳肴を出して懇にうちとけさま〳〵の物語りに溜助うつとりとして本心を失ひ酩酊に及びし頃主人の翁歸り來れりといふ音に婦人は酒肴をかくし持つて逃げ失せたり溜助は膽を潰し醉ひもさめて手あらひ口すゝぎて心を改め翁にあひて福相になるの傳授を希ふ。

「翁の曰く今汝の相貌を見るに酒色に染みて心相を汚す、酒色の情を發する時は貧相に上ぬりして短命の相を出し、福相を滅するの大禁物毒藥である、今改めて七日物忌致し來れ、今日傳授なりがたし」と大に怒りて奥に入りければ溜助夢のさめたる如く驚き恐れて宿に歸り、七日の物忌丁寧にて八日目の未明に翁の家に至れば下男立ち出て「今朝は主人少々持病の疝痛にて只今針治致し居ります是へ來りて暫くお待ち給はるべし」と奥の書院へ通し茶煙草出して男は去りました、溜助一人待つひまに不圖心の一軸を見れば瑞圖が山水の見事なるに此方の額を見れば子昂の馬の

自畫讃なり、永德古法眼床の傍にほこりまぶれに捨てあり、大幅の卷物をひろげて見れば宋より明までの名家の書畫の數々仰山なり、かたへの屏風はかたしは行成、かたしは佐理卿の眞筆なり、隅に立て垢づきし張まぜの小屏風は顔魯公米元章歐陽詢や懷素が草書の見事なるに魂を飛ばし、障子をあけて庭を見れば其の物好み格別にて五百兩や千兩にては世にも得がたき石燈籠や手水鉢飛石樹木に吐息をつき、此の樣子にては茶器や道具の數々名物奇品廣大なるものならむ、如何なれば此の翁かかる福相果報ものであらうか、我も今日福相の傳授を受けて此の主人の如き境界を得んと大に羨み待ち受けし折節下男來りて「只今主人がお目にかゝります是へ來り給へ」と男の案内につれ一間々々行けば行くほど結構にて善つくし美つくしてあるを大に羨み終に主人の居間に至りて平伏し、

「今日こそ御傳授をし給へ」と申し述ぶれば翁大に叱つて曰く「汝心身共に清淨に致し來れと申し付けしに大に心を汚し慾心を生じ人を羨む人相あり、物をもてあそ

ぶ時は其の志を失ふといつて皆貧相に肥をして福相になるの大禁物なれば今日傳授致したくも其の毒藥にて出來がたし、早く歸りて今改めて七日の間深く心身共に清淨に致し重ねては福相をけす毒藥を持つて來てはならぬぞ」

と大に叱りましたのに溜助も仕方なく又々七日の物忌を慎んで致しました、後翁の家に行き案内を賴めば老女出で來りて申すには、

「今朝より來り給ふを主人大層お待ち申しました早く早く此の椽側を眞直にお通りなさい」といふ溜助は悅んで今日こそ傳授速かなりと椽側を歩きしが唐犬一匹かけ來りて溜助の着物の裾を喰はへ引くを振り放して行くに又かけ來りて裾に喰ひつかうとするを溜助腹を立つて、扇を持つてさん〳〵に打ち追ひ走らせて主人の居間に行き傳授を希へば翁莞爾笑つて曰く、

「汝未だ怒氣短慮の色ありて心誠に靜ならず、すべて短慮は貧相を增し助けて福相に至るを消す大毒藥なり、此の毒藥を所持する間は私が何のやうに福相になる傳授

を致したく思ふても此の毒藥が貧相を增し福相を消して私の力にも及ばぬものなれば早々歸りて今七日の間篤と心身を修め清淨に致して來いよ」

と座を立つて奥に入れば溜助今は仕方なく又々七日物忌慎しみ堅固に致して翁の家に行きて溜助參上致しましたと申せば侍出で是を取り次ぎ「主人只今少々用事に取りかゝりましたから暫くお待ち下され」と申され半時待てど沙汰もなく一時待てど何の沙汰なく二時三時小一日待てども更に主人對面致さないから最早根氣もつき果て既に其の儘歸らうと思ふ折ふし翁出で對面致し「今日は是非福相にして上げやうと思ひの外福相には大禁物の辛抱薄いといふ毒藥をお持ちなされた諺にも、

――運氣は根氣にあり辛抱が寶堪忍が金なり――といふではないか、然るに汝辛抱薄く根氣のないのは是れは貧相を助け增して大に福相を消す毒藥で此の毒藥のある間は何うしても福相には致しがたい、早く歸りて今又七日相慎みて後に來いよ」と襖立てきり入りましたれば溜助はたゝ茫然と呆れ果て宿に歸りて又々七日の間深く

心を清淨に致し身を慎み八日目の鷄鳴に衣服あらため禮服着して翁の家に行くに今日は翁早く門前に出て是をむかへ、

「早くもよく來り給ふた、汝の人相今日こそ實に無欲無心で放心短慮の邪念もなく物事を辛抱するの堪忍滿ちて福相となるの血色明らかなれば我亦これを明らかに告げやう」と自ら案内して奥の奥なる閑室幽亭に引きつれ、溜助をすはらせました、溜助慎しんで一禮を述べ頭をあげて此處の樣子を見るに、異香紛々と滿ちて玉をつらね錦繡をのべ其の結構人間界と思はれません、實に爰こそは仙境であらうと猶慎しんで一心に福相に至るの傳授を願ふの外餘念他念がありませんでしたから翁は悅んで曰く「ア、い、あんばいだ汝今日は毫厘も餘念放心なく實に信心堅固である、今こそ汝に貧相を滅し大福相に至り家長久に子孫繁榮の傳授をしやう、餘人は格別一子たりとも相傳してはならぬぞ」といふ堅き神文誓紙を取つて又一間奥へ誘ひ、慎しんで承けよ「然らば福相にさせてやらう」といふ言に、溜助少しも餘念なく一

心不亂にあり難く頓首平伏しました。

翁は閉目金聲にて「得よや得よや今こそ傳授殘りなし」と錦の幕を引きあぐるに溜助信心膽に銘じ首をあげて是を見れば世に温順にて柔和笑顔ならびなく胸廣く腹滿ちて左の手には團扇を持ち右の手には童を撫で張り膨れたる大袋にもたれて座せし布袋和尚の福壽滿々たるの世にも大いなる木像であるのに溜助思はず横手を打ちアラありがたや、

唱ふれば佛も我もなかりけり南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛……と無二の御示敎にて生死苦樂の境を離れ貧富解脫の眞の福相篤と御傳授致しました……翁眼をむき出して曰く、

「恐なるかな汝が見識其の一法を知つて萬法を知らず道は近きにあり然るに汝遠きを求めて其の足元の肝要を失ふ知る事は三尺の童も知ると雖も行ふ事は八十の老翁も行ひがたし、今汝が見たる所の見識も是皆すぐに貧相なり是等を以て何ぞ福相の

傳授とせん、旨に見せる術もなく聾に聞かす法もなし」と翁は怒りて座を立ち入らんとするを溜助驚き引き止めて曰く「成程翁ののたまふ如く我實に高遠に心を馳せて其の近きを知らず、其の源を見ると雖も流れに益あるの道理を得ず、是を得ざるは誠に未だ貧相を免れざるなり、先生深く慈悲を垂れて福相に至らしめ給へ」翁顔色を和げて曰く「汝よ汝が未だ至らざるを知るは其の至るの道なり、汝未だ貧相を免れざるを知るは是れ其の貧相を免るゝに至るの道なり、よりて我今こそ底意なく大福相に至るの道を說かむ。其の福相に成るの傳授は則此の布袋の像なり、先づ福相に至るの第一は此の布袋の如く常に柔和にんにくにて明ても暮ても柔和にて笑顔よきなり、親に向ふてもニコ〳〵すれば孝子なり、主に向ふて柔和なれば家内和合繁榮し、兄弟朋友に柔和なれば悅んで睦まじ、商ひするにも耕すにも細工するにも唯柔和にてニコ〳〵すれば笑ふ門にぞ福來り榮ふるなり、或人の句に――月は秋人は笑顔と定めけり――此の發句の如く唯定めたきは人の常に笑顔なり、笑顔ぞすぐ

に福分にて惡き事は笑顔にては出來ぬものである。喧嘩口論短氣短慮は笑顔で出來ず、悋氣嫉妬損と貧乏は笑顔で出來ず、邪見剛慾病氣と死するは笑顔で出來ず、其の外惡事の數は多くあるけれど笑顔で出來るものはなければ偏に笑顔をよくなさい去ながら色と酒と遊興とへつらひは笑顔でする、邪路もあれば此の一方のみは用心なさいよ。

扨又此の布袋の如く萬事に胸を廣く致し腹を大きくして誠を滿たしめ何事にも如才なく有りのまゝに胸も腹も打ち出して隱さなければ常に安樂にて此上なき福相であります、右の手に持ちたまふ團扇こそ人慾の塵を拂ひ常に心をすゞしからしむ、左の手に撫づる童子は無我無心にて色にも慾にもかゝはらず萬の事に執着せず朝夕怠りぶせうせず走り廻りて速なるを願ふてなり。又何をするにも此の布袋の如くドッサリと腰や尻を据ゆるが福相なり、子は孝行に尻をする妻は操正しきに尻をする親は子を慈愛するの誠らしきに尻をする夫は身持正しくして妻を愛するに尻をする士

農工商其の職分に脇目なくドッサリと尻をするて自分の道々を勵む時は貧相忽に失せはて丶世にも目出たき大福相となるものである。然りと雖も此の道中々易く渡れる事ではない、顔色をよくし柔和にするも胸を廣くするも腹を大きくするも腹に嘘を込めずして誠をみたすのも人慾を拂ひすつるも無我無心になるも自分の職業に安んじてドッサリと尻をすゆるも中々難かしくして容易に成しがたい事である。其の成しがたい事を成すの秘密口傳が茲にある、其の秘密口傳といふは則此の布袋和尚の常に放し給はざる所の袋である、其の袋が成しがたきを成し出來がたきを出かすの福相の眞の傳授であるといふの傳授が口傳にて元來袋といふ譯は汝知つて居るかといふに溜助答へて私未だ袋といふ義理を存じませぬ翁曰く、

「汝未だ知るまい是を知つて身に行ふものは端的に忽福相になつて家榮ゆるものである。然しながら知ることは易くして身に行ふことは難いものである　汝これを知ると雖も身に行はざればヤッパリ福相になることは出來ないぞ」

溜助再三毒藥を持ち來りし爲めにコリ〳〵して今日こそ如何にしても傳授を受けだくして是非々々傳授し給はれと底頭平伏百拜して希ふ。

翁の曰く世に袋といふ譯を知るものは至つて稀である、是を實知して身に行へば貧相忽福相となる事受合である、今こそ汝に傳授しやう。

||福は勞にあり||

といふ事で福を得んと思はゞ辛抱苦勞をつみかさねる事である。昔の天子樣も人民の爲めに勞し給へば四海安樂なる福分あり、諸侯國の爲めに勞し勤め給へば國萬代の福分あり、士庶人己々が家業職分に勞して怠らなければ家も身も榮ゆるの福分あり、子親の爲めに勞し孝行なれば萬善の福分あり、家來君の爲めに勞し忠なれば家祿相增すの福相あり、妻夫の爲めに勞し貞操なれば美名世にあらはるゝの福相となる、親勞して身持ち正しく妻をさとせば家内安全の福相となる、朝の寢むたきも勞して早く起きればすぐに福相夜の寐むたきも勞しておそく寢て職分を守ればすぐに

福相、酒の呑みたきも色のむさぼりたきも屹度勞して相慎めばすぐに福相、欲のなしたきも腹の立つも物にたいくつするも屹度勞して辛抱、堪忍すればすぐに其のまま大福相、身勝手のしたきもいひたい事も恪氣嫉妬のやきたいのも人の誹りたいのもよく〳〵勞し苦しんで相慎めば安樂世界の福相となります、又稽古事學び事の苦しきも勞して修業怠らなければ上達上手の福相となり、病人の堪えがたいのも勞してよく養生すれば無事長命の福相となり、貧窮の身の難義であるのも勞して晝夜家業を勵めば福相となり、身代の持ちにくきも勞して質素儉約を守ればすぐに福相となるのである。

昔より世に苦勞を重ね辛抱堪忍の勞を積みて大福相と成つた人々は澤山ある、之によつて福を得んと希ふものは偏に勞して勤めることである。故に福は勞にありといふ事で福勞と申すのである、布袋和尚は常に福は勞にありといふ事をさとつて寢ても覺めても立つても居ても此の福勞に持たれかゝりて少しも餘念がないのである、

此の大切の傳授をば汝が信心堅固なるにめでて傳へるのである、福は勞にあり勞し勤めて福相になるが可い」

といふかと思へば翁も見えず布袋も見えざるに思はず知らず横手を打ち我は勞を積み重ねた甲斐があつて今こそ眞の大福相になつたぞ誠に福は勞にあるのである。あゝ解つた孟子のいはれた

――天壽疑はず身を修めて以て之を俟つ命を立つる所以なり――

とは此のことぢやと悅ぶ夢も明け方の目がさめて見れば唯鳶飛んで天にいたり鯉は池におどりてポチヤン〳〵といふ音のするばかりであつたとの昔話。

閑をせず身をはたらきてつとめよや
萬の福は勞にこそあれ

乞食か君子か

或る人が大阪の東區備後町邊を通りかゝると年の頃五十ばかりの乞食が十四五になる我が子の髻をとつて大地へ壓しつけその上へ乘りかゝつて「畜生め汝は何時もいふ俺の言葉をどこへ聞いたのぢや、そんな腐つた根性では何れ俺や阿母の首へ繩をかけるに相違はない、もう怨して置かれぬ」と拳を振り上げ打ち下して嚴しく折檻する、側には所謂阿母であらう四十恰好の女乞食がゐて「お前が惡いのぢや打たれても仕方がない妾やもう何にもいはぬぞよ」

とばかり一言挨拶の口さへ利かぬ男は益々おこり立つてきやつきやつと喚く我が子を踏んづ蹴つの目に遇はせる。

乃で彼の人も見かねて「これさ待ちなよ」といろ〳〵いひ宥めても乞食は、

「否何卒放つて置いて下されませこんな奴を活して置いては夜の目も寢られません」といつて涙を流し齒軋りして愈々打つて打ち据ゑる樣子が殆んど殺しもかねないので追々人集りがした、其人たちも口々に「怨してやれ怨してやれこれさ怪我でもあつては大變ぢやないか大概にして置けよ」と挨拶すると乞食は漸く合點して士に手を突き、

「まことに捨て置かれぬ奴なれどお旦那方のお言葉故今日は赦してやりますが何ともはや情けない奴でございます。一通りお聞きなされて下されませ、最前此奴が美しい餅を十ばかり袂かち出しては食ひます所、その餅はかねがね私の見覺えのある餅、乃で何うしたのぢやと聞きますと御堂前の北の辻に露店を出してゐる餅屋さんに貰つたと申します、そんなに澤山の餅を下さる……はて可怪しいことゝ存じましてあれなる嬶とも話し何うも不安心な所から先刻御堂前へ行つて樣子を窺ひまする

と餅屋さんが隣店の婆さんへの話に、さて〳〵油斷のならぬことぢや一寸此處を空けた間に餅を十ばかり盗まれたが定めてこの邊をうろつき廻つてゐる子供乞食の所爲であろとのこと、それを小耳に挾んだ時私の胸の中の口惜しさお察し下されませ私もたゞ今こそ斯やうな乞食をして居りますけれど元は遠國の小百姓親の代から不仕合で持高に離れ村中へ雇はれてその日その日を送ります中何うした過去の因緣やら夫婦とも長の煩ひ少しばかりの諸道具鍋釜までも賣り拂つて種々養生した効に命だけは助かりましたが御覽の通り手足の弱い體となつて何することも出來ません、といつて村中の御厄介になるも氣の毒と四五年前から國を出て斯やうなさもしい乞食の境涯といひさして涙を拂ひ「人樣の門に立つてお餘りは貰ひますが人の物といつては塵一本箸片々も曾て盗んだことはございません。人と生れてそんなことをして可いものなら何の乞食なんぞを致しますものか、極寒の冬も菰一枚缺け椀持つて門に立ち寒い目飢じい目種々の憂き難難をしますのも畢竟盗みなんぞをせまいが爲

めでございます、それ故此奴にも旦暮いつて聞かせますことは好んで乞食をするのではない、段々の不仕合が積り積つて斯うなつたので天命の乞食ぢや程にたゞ正直に乞食をせよ、必ず人を羨むな形には乞食をしても心にまでは乞食をするな、體には菰を着ても心にまで菰を着るなと常々申し聞けますのにそれにまあ只今の始末大それたことを致しました。

――三歳兒の魂百までも――

とやら此奴も後には欺僞だ萬引だと次第々々に惡事が長じて人樣の手にかゝつて殺されるか警察の御厄介になるか大抵知れて居ります故寧そ親の手で殺してやらうと存じましたがお旦那方のお言葉でまことに命冥加な奴でございますこれ〳〵」と倅を呼んで「汝も此處へ手を突いてお禮を申せ、あゝあり難う存じまする」といひ終つて夫婦互ひに顔見合せほろ〳〵と涙を溢す、周圍の人々これを見これを聞いてこれ亦涙を溢さぬはなく中には持ち合せた小錢など出してやる者もあつたとい

ふ。

何と感心なものではないか、形は醜い乞食であるけれど心は清い君子大人、體には菰を着ても腹には錦を着てゐるといふもの、實に感ずべきの至りである、それに就けてもお互に恥づかしい形に於ては飽食暖衣尙ほその上に雨露にも打たれないやう各自身分相應の家を構へてその中に起臥しそれでも足りないで花見の遊山のと榮耀の限りを盡してゐながらそれはあり難いことゝも思はず彼がない此が欲しいのと年中不足だらゞで心の乞食をするといふのは何と淺猿しい根性ではないか、孟子が禽獸に近しとけなされたのも道理千萬異議を挾む譯には行かぬ。

然うした乞食根性であるから身の行ひもそれに似て不忠不孝なことが出來たり、夫婦爭ひ兄弟爭ひ他人の交りは嘘の吐き合ひ家業を怠り分限を忘れ色に耽り酒に溺れ尻の仕舞は人を欺したり騙つたりとは呆れ果てたる次第よくまあ罰の中らないことである。

||渴しても盜泉の水を飲まず飢ゑても嗟來の食を食はず||の覺悟は必要である。

逸居して教なければ禽獸に劣る

飽食暖衣

飽食暖衣逸居して敎へなければ禽獸に近しといふ實に嚴しい警めである。人間命のある間は衣食住の三つが要る、孟子はこの三つを擧げて口には飲み食ひを充分にし身には暑くも寒くもないやうその時々のものを分相應に拵へて着て、尙ほその上に雨露に打たれぬやう二疊敷でも三疊敷でも我が家を造つてその中に安穩に寢起きしてゐながら、聖人の道を聞かうともせず人の道を學ばうともせず唯のらりくらりしてゐる者は禽獸に近いとの言葉、何とひどいいひ方ではないか。

だが退いて考へて見ると孟子のこの語にはまだまだ懸値がある、正札つき現金懸値なしにいふならば禽獸に近い位ではない、禽獸にも劣るといはなければならぬ。禽獸はその形こそ禽獸なれ禽獸の道を知らない禽獸は禽獸の仲間に一匹としてありはしない、のみならず禽獸は衣食住の三つを人間のやうに充分にはしてゐない。成程牛馬は澤山物を食ふではあらうけれど高が知れてゐる、麥か豆か草か秣か糠かその他世界の廢り物を食つて重荷を負うたり曳いたり大層な働きをしてゐる、人間は何うか五穀野菜を初めとして魚鳥獸の命までも取つて食ひ、その上四季折々の果物まで餘さず洩さず掻き込むその癖秋柿の實が熟してそれを烏が突つゝきでもすると眞赤になつて「えゝ忌々しい盗人烏め折角の柿を汝に食はれて堪まるものか、それ網を張れ否烏威しが可い」と滅多無性に養え返る、烏が物をいはなければこそで若し物をいはうものなら、

「何俺を盗人烏ぢやとお前こそ五穀野菜で満足せずに烏や魚までせしめてしまい何

不自由もない筈ぢや、それに何ぞや俺共が天の與へと思つてをる生り果物を無悲道にもぎ取るとはお前こそ盗人ぢやろ」と反對にやり込めるも知れぬ、幸なるかな烏はそんな口を利かず唯向ふの土藏の屋根へ逃げてかあ〳〵阿呆々々〳〵と此方を笑つてゐるばかり、お互に仕合である。

その他着るもの住む家になると尙ほ一層甚しいが多くの人は肝腎の道といふものを知らない爲め何から何まで結構づくめの中にゐながら年中、顏をしかめて時節が惡いの、世が末になつたの家相の人相の運の肩の星の祟りのと自分の愚痴を向ふへ晩んで眼ばかりきよろ〳〵手足の利かない中風患者を見るやうに又狂人か何かに似て大飯を食つてはしくり〳〵と泣くばかり何の役にも立たないのみか大きな世界の厄介者である、何とつまらぬものではないか、して見ると禽獸に近しでは未だ足らぬ、懸値ない所、遙に禽獸にも劣るのである。

であるから人はたゞ〳〵人の道を明めてその道を命限り根限り勤め行ふの外はな

い。

親の心

私は田舍の百姓でございますが倅を奉公に出したく存じてかね〳〵知己の方に賴んで置いただ今連れて參る所で何商賣が相應しいやら何卒お考へを願ひますと、

例の翁の許へ尋ねる人がありました。

「商賣の相應不相應は翁に聞いては結句邪魔になることがあるものだ、その邊は先づ知己の方へ落ちついてよく相談の上決めるが可からう、年は十一か十二か、奉公の口は何程もあるぞ、扨親仁どの四五年も奉公させお役に立つ時分にまんまと呼び戻すその智慧づけといふやうなことではないか、其の手も間々あると聞いたがこれ

は甚だ宜しくない、縱ひ主人と相對の上にもせよ郡の結構なことを見習つて歸つては田舍の間に合はぬのみか氣ばかり高くなり着物や食物にまで不足をいひ後には持で餘すものだとか、兎角百姓は百姓舟乘りは舟乘り田舍に住む者はやつぱり田舍仕立が可いぞ」

親仁は少々恐縮して「私共はわづかに田畑十段足らずの百姓で三人の倅を持つて居ります、これを三つに分けて讓れば三人ながら一生身を粉にして働かねばはつたいも養はれぬ身分でそれを不便に存じます所から切めて一人だけは奉公させ末の出世を願ふばかりでございます、なか〳〵榮耀どころではございません」

「成程々々親心ぢやな

＝燒野の雉子夜の鶴＝

子を思はぬ者はない。然りながら裏へ廻ると姑息といふ愛になる、必ず甘い毒を食はせまいぞ、取り別け奉公する子には親の甘いがつひ毒ぢや、苦い藥を用ゐるが可

い」といつて翁は明惠上人の例を引く、

昔明惠上人の庭へ一匹の鹿が來て草を食つてゐると上人はそれを見て「あの鹿を打つてやれ叩け追ひ拂へ」と聲荒く下知をし、自分も杖を振り上げて情なく追ひ拂つた。すると弟子たちは驚いて平素は物に優しい上人が今の振舞は氣でも狂れたのぢやないかと語り合つた、上人はそれを聞いて「人に馴れさせまい爲めぢや人馴れて里へ出れば終には人に命を取られるのが不便さに打たせたのぢや」といつたとか

「其許も子が不便なら熱い灸をするがよい」と敎へ、さてその子に向つて、

息子よ今親御のいはれたことを覺えてをるか、田舍にをつては鋤鍬の泥塗れ不味い物を食ひ汚れた物を着て一生辛苦心勞をせにやならぬ、親はそれを不便に思つて奉公させるのぢや。

――父の恩は山よりも高く母の恩は海よりも深し――

必ず親の心を忘れまいぞ。

翁は更に例話をするに就いて、

「さて其處にござる番頭衆もよい序ぢや此處へ出て聞かつしやれ面白い話がある、さあ〳〵ずつと寄つて聞くが可い」と大勢を召集して語る。

或る時或る處の番頭が二三人遊所へ行つて酒宴の折から傍に侍つた遊女藝者に笑ひながらいふやうは「この京中の遊女から藝者一々數へ擧げたら夥だしい人數だらうが、その內落籍されて嫁づくのは百人に四人五人もあるなしだ、其の殘りは一體何になるだらう、蝶々になつて飛び去つたといふ沙汰も聞かねば蟬になつたといふ其の抜け殼も見ない、又古物店や露店にも手の抜けた遊女だの足の折れた藝者だのを曾て見たことがないが、何處へ消えてしまふのかなあ」

と冷かし半分不審を立てると遊女も然る者「仰しやる通り遊女の數も多いでせうが然し京中のお番頭衆に較べたら百人に一人もありますまい、その夥しいお番頭の中で首尾よく宿入りをなさる方は百人に十人か十五人二十人には足りませんそうで、

その殘りの人たちは何になつてお終ひなのか知ら、仙人にでもおなりなさるか髭も剃らず髪も結ばず木の葉衣といひさうな物を着て河原に寢てらつしやるお客を見たといふ人もあります。鐵拐仙人のやうな風俗で歩いてる方を妾も時々見ましたが、皆な仙人にはなれますまい、どこかに入る穴でもあるか不思議なのは妾共よりも貴方がのお身の上で末は何うおなりのことやら」と藝者が三味線を彈き立てると三人の番頭共少しは醉が醒めたのかこそ〳〵と逃げ歸つたとか。

「如何さま此の遊女のいつた通り夥しい番頭の中首尾よく宿へ入るのは稀で大抵は失策つてしまふと見えた我が身を忘れた番頭である、その我が身を忘れる本はといへば親の心を忘れる故ぢや、親の心を忘れるから不奉公して流浪の身となつたり、金を費つて缺け落ちを極め込んだり、種々親の心を苦しめる、手で殺さぬけれど親の命を縮めること不孝この上もあるまい。斯やうな人は縱ひ憐悧であらうが、算筆に勝れてゐやうが、廣い世界に佇む處もあるまい、扨又親の心を忘れぬ人は不奉公

して流浪などしては親に苦勞をかける故と、蔭日向なく大事に勤め、喧嘩口論の揚句人に疵でもつけるか、身に怪我でもあれば親の心を痛めると思つて道分何事にも堪忍して負けてをるやうに身を持ち、病めば親が案じる故と不養生をせず、危いところへ行かず何事もたゝ親の心に任せるによつて少しは鈍物でも不器用でも主人にも見捨てられず朋輩にも憎まれず身も治まつて自然出世もするわけぢや」と告げ翁の懇意の或る番頭、二十五の時半年も經たぬ中に主人夫婦が相尋いで病死した、後は三つになる男の子たゝ一人、番頭はこれを守り立て相續させんとの心を定め主人の一家一門へこの趣を願ひ、さて又自分の舊里へ行つて親兄弟に暇を乞ひ歎いていふには、私も今四五年もしたら宿へも入り兩親には安堵させ兄弟の心頼りにもなるやうと樂しみに思つてをると、思ひもよらぬ不幸に出逢ひ主人御夫婦には別れる相續人は幼し、お家危急の場合となつて見捨てゝ歸る譯には行かぬ、自分及ばずながら後見してその子を守り立てお家を繼がせる了簡、この後は自然無沙汰にもなら

うと思ふ、この儀何卒許されたいと涙を流しての願ひ、親の心としてこれを聞いて忠義を感じて悦ぶまいか賞めまいか、爾來この人は大酒をせず飽くまで食はず商賣用で急ぐ時にも矢橋を渡らず、馬にも乘らぬ常々いふことに主人成長の後までは我が身ながら大事の身だとて養生堅固に勤めた、これを聞いて親たる者安堵しまいか喜ぶまいか、これなぞは親の喜ぶやうに行つたにより忠も立ち孝も立ち又我が身も立つたのぢや、この所翫味するが可い、この人夏は丹波布冬は木綿の外身に着けず、萬事質素にして家業に油斷がなかつたので家は益々繁昌して今も尙ほ榮えてゐる。

正宗の銘刀

世間多數の人はこれを知らない、我が身の尊くあり難いことに氣がつかず樂しみを外に求めて何が欲しい彼が欲しい、人よりもよい帶がしめたいの人よりよい着物が

着たいの人よりよい櫛笄が挿したいのと滅多矢鱈に向ふへばかり目をつけて一體何うする了簡であらう……孔子も

――士道に志して惡衣惡食を恥づる者は未だ與に議るに足らず――

といはれた、實にやこの身この儘活きた神、活きた佛ともいふべき大切の身を以て、區々たる金錢諸道具と一生首つ引きして、果てはこれと討死するとは何とまあ氣の毒なものではないか、これに就いて可笑いし話がある、或る田舍のずつと古い百姓の家に先祖から持ち傳へた正銘正眞の正宗の名刀があつた、道具好きの人がはるばる訪ねて行つて

「何卒拜見したいものです」

と所望すると、主人は早速櫃から取り出して來た。名刀だけに錦の袋へ入れ折紙ま

で添へて立派な桐の箱に納まつてゐる、取り出して見ると白木の鞘に入れて紙を一尺二三寸のものである。先づ鞘の上から刀の反り工合寸法恰好などを一通り見合せてさて抜かうとすると何うしても抜けない「これは如何なこと……」

主人は不氣味な顔で「久しく使ひませんから多分錆がついたのでございませう何れ……」

と手に取つて力任せに引き抜くと、眞赤な赤錆で猫が飛びつきさうである。

客は驚いて「大切なお道具をこれは何うなされた」と尋ねると主人は「はいこれは先祖傳來の正宗でよく切れる道具だとのことでしたから私の思案に何分切る爲めの刀だ使はずに措くのは無益なことゝ存じて精々使ひましたので到頭こんなものになりました。

「何にお使ひでした」

「何といつて定まつたことはございません。大根を切つたり茄子を切つたり魚を料

理したり草を刈つたり竹を割つたり木を削つたり、又藏の壁を塗る時には藁ずたを切つたりしましたが何分昔の道具で使ひづらい、使ひづらくても先祖からの道具だからと辛抱して使ふうちに、御覽の通り切先は折れる及はこぼれる銹は來るといふ始末終にこんなものになつてしまいました。何程正宗でも使へばこんなになつて及物の用をせず摺木同樣でございます」といつたとか、實以て馬鹿げ切つたわけだが世間の多くの人がこの百姓と正に同一ではあるまいか、

――身體髮膚これを父母に受く敢て毀傷せざるは孝の始めなり身を立て道を行ひ名を後世に揚げて以て父母を顯すは孝の終りなり――

人も我も父母から何一つ不足なく生みつけて貰ひ、心には五常の道理を具へ、見れば見え聞けば聞かれる自由自在のこの名刀、實に正銘無疵の正宗には相違ないがこの名刀を日々何に使つてゐるか、朝から晩まで何か欲しい彼が欲しい兎角は金の世の中よと子孫の害になることをも思はず、人を突き倒しても金をしてやらうといふ

慾の爲めに使つて山椒太夫や斧九太夫のやうな赤鰯になつたり、主人のことも親のことも何も彼も夢中になつて錆びかけて請人へ預けられたり、親に勘當されたり後には鼻を落されたり眼を潰されたりして缺け椀隻手に劔菱の男山のといふ模樣のついた酒樽の古着を着て濱納屋の下や橋臺の根に錆びついたりするものが世間甚だ少くない、或は又各自の家業を嫌つてのらくらと遊び暮し大酒を飲んだり博奕を打つたり嘘をついたり人を欺したりして揚句の果は首縊りか身を投げて土左衛門と改名する手合もある、甚しきはお上の御厄介となつて入獄牢死と朽ち果てゝしまふのもある、何と殘念の至りではありませんか、

佛にも神にも人はなるものを
などあだに持つ己が心を

大切な天命のこの體を孝悌忠信の道には使はないで身最負身勝手の爲めに使ふのは世の人滔々として然うである、乃で何となく底氣味が惡い心恥づかしい、その箇正

宗の名刀で料理するのであるから鳩巣先生の歌に

人知らぬ心に恥ぢよ恥ぢてこそ
終に恥なき身とはなるらめ

若い男などが親のいひつけか主人の用事で我が行くべき所へ行く時には恥づかしくも何ともなしに家を出るけれど、行つて惡い茶屋遊びにでも行くとなると腹の中で何となく氣恥づかしい、畢竟體の使ひ勝手を取り違へるからである、乃で親の顏つきや主人の顏つきをきよろ〳〵見廻したり、丁稚や小者にまで種々氣がねしたりしてこそ〳〵と出かける、我が家の敷居を跨いで出るにも彼の浪人者がどこかの關所を越える時のやうにつひ肩がすぼめられる、何と醜いことではありませんかその都度この正宗の名刀に疵をつけたり錆を出したりするのである。

さて先方の茶屋へあがつて女郎買ひ藝者買ひ飲めや歌へや一寸先は闇の世などと大聲を張りあげて騒いでゐる中からも何うやら氣がすまぬ酒もまづい何と明かな名刀

ではありませんか、斯くて夜を更かして家へ歸ると戸には掛金がかゝつてゐる、何時もなら握り拳を振りかざしてどん〳〵破れる程叩く三助も、この時のみは指の先でこと〳〵、聞えるやうに聞ぬやうに叩く、すると長吉が聞きつけて大喝一聲

「誰だ」と答める三助びつくりして、

「おれだよ」と低聲にいふと長吉は故意と大きな聲で「おれつて誰だい」「おれだよ三助だよ」「あゝ三助どんか」と馬鹿に調子が高い三助ははつとして胸がどき〳〵。

「南無三しまつた、何卒今の聲が旦那の耳へ入らなきや可いが、旦那は寢たのか起きてはゐないか」とさま〴〵の心づかひ、さて〳〵苦勞なことである、漸く掛金を外して貰つてさて戸を開けるにも何時ものやうにがら〳〵びつしやりとは出來ないそろ〳〵と開閉する、戸が釘にでもかゝつてぎち〳〵しやうものなら我が胸もやつぱりぎち〳〵何と明かなものではないか。

世の中の人は知らねど科あれば

我が身を責むる我が心かな。

人間の敵

誰の身の上にも命を取りに來る敵がある。朝から晩まで何程あるやら知れぬ、先づ第一には飢といふ敵これが世界の强國獨逸より一層恐ろしい、身分の貴い賤しいに論なくこの大敵が日に二三度づゝ押し寄せて來る。この場合何程親切な親兄弟が側についてゐても何程忠義な家來が邊りを守つてゐても加勢することも出來なければ又身代りに立つわけにも行かない、ぐづぐづしてゐれば危險千萬何れ命を取られなければならないが、この危機一髪といふ時忽ち姿を現はして命を捨て身代りに立つものがある。何かといへば米麥などの五穀類を初めとしてその他の野菜もの彼の大根のみで

はなく茄子、胡瓜、牛蒡、芋、人參、蕪菁などの食物が出て各自その命を捨てゝ鼻の下の穴へ飛び込んで呉れゝばこそお互に不思議な命を助かつて斯うして活きてゐられるといふもの何とあり難い事ではないか、それから又冬向になると雁や鴨やさま〳〵の鳥が出て人の爲めに命を取られる。その外日々海河から引き揚げられる數萬の魚に就いても考へて見るが可い。誰の爲めに惜しい命を取られるか皆これ人の爲めに身代りに立つのである。勿論天が物を生ずるのは誰が爲め彼が爲めといふそんな立分はないけれど大が小に養はれ小が大に制せられるのは自然の道理なのである。して見ると食物ばかりの恩澤でもこんなあり難いことはない、うか〳〵思ふ。罰が中る。扨又二番目に押し寄せる敵には凍えるといふ敵である。この敵これ亦人の命を取る恐ろしい敵であるがこゝに綿であるの蠶であるの毛織の紙子のといふものが「どつこいやらぬ」と現はれて人の爲めに命を捨てその大敵を防いで呉れる、些と綿木の身になつて考へるが可い折角美しい白いものをふつさりと生らしたと思

ふと人にむしられてしまふ。

——世に着せて裸でくらす綿木かな——

で主の綿木殿は野中に立つて裸の行、犢鼻褌一つも當てゝはゐない。又蠶などいふものは人の着だけ一枚に八萬四千何百とかの命を捨てるといふが、それから推すと小袖一枚の裏表中の綿から絲からでは何十萬の命やら何とまあ不便な者ではないか次に三番目の敵としては雨に露に雪に霜にこれが亦恐ろしいもので人の命を取る。

幸なるかな野山に生えた松の木杉の木その他さま〳〵の大木が人の爲めにその身を切られ柱になり鴨居になり敷居になり床板になつてその大敵を防いで呉れる、お蔭で人は雨の降る日も風の夜も樂々と寢起きが出來る何とあり難いことではないか

古歌に

天地の中に生へたる草も木も
神のすがたと見つゝ恐れよ

その他一切萬物が皆な人の爲めに命を捨てる何程利口なお三どんでも摺鉢へ味噌を入れて握り拳で摺つて見るが可い、二三度も使つたら手が赤剝けになるは必定所へ摺木といふ親切者がによつと出てその身を削つてお三どんの手を助ける、昔親鸞上人が越後の國を御廻國の時或る人が摺木の繪を書いて、

「これへ何かあり難いお示しを……」

といふと上人は、

身を削り人をば救ふ摺木の
この味知れる人ぞたふとき

と書きつけられたとか、成程摺木といへば通り一遍何でもないものゝやうに聞えるが信を起してこれを見ると廣大な功德がある。

それのみではない熱湯を汲むには柄杓が身代りに立ち、寢る時には枕が助け、冬は夜着やら蒲團やら、夏は蚊遣りやら蚊帳やら、雨が降れば傘が助け道が惡ければ足

駄が助け草履に足袋に團扇に手拭に楊枝に元結に一々いひ盡されるものでなくこの世界にある程のものはお互にこれを取り盡しこれを飲み盡しこれを着盡す何とあり難い結構なことではないか、

即ち活きた阿彌陀の光明が遍ねく十方世界を照らして一切の物と形を現はし、我等を助けるのであるが第一の此方の心一つが助からないと、

||心こゝにあらざれば視れども見えず聽けども聞えず食へどもその味を知らず||

とかで何が濟まぬの彼が足らぬの惡世界の苦の土のと何から割り出していふのやら狂人を見るやうに朝から晩まで顏を澁めて地獄暮しをしなければならぬのであるから、人も我も志を立てゝ心學を修め、各自その本心を知るが可い、そして信の信心者となれば一切萬物が我が身代りになつてゐるといふことがしつかりと解つて來る而もそれが皆たゝであつてそのたゝに就いて面白い話がある。

夏の一日十四五歳の男の子が桃の葉を藁で束ねて「桃の葉桃の葉……」
といつて町中を賣つて歩いてゐると向ふから魚を魚籠に入れた魚賣りが、
「鯛よう鯛よう……」
と呼びながらやつて來て此方の桃の葉を見ると、
「おいその桃の葉は何程だい」といふ。
「一把が四厘づゝよ」「そりや高い一厘に減けな」「駄目だ損が行くから」といふ。
「何損が行くものか何處かの桃の葉をたゞで取つて來たのだらう」
桃の葉賣りは負けない氣になつて、
「おうたゞで取つて來たのだよ然ういへばお前の鯛もたゞでぢやないか」
といふ魚賣りは腹を立てゝ、
「何のこれがたゞなものかい問屋から買つて來たのだ」
「その問屋へは何處から持つて來た」

「知れたこと漁夫が持つて來たのぢやないか」
「ぢやその漁夫は何處から取つて來た」
「海からさ」
乃で桃の葉賣りが、
「その海へは金でも入れて取つて來たのか」
との一言に魚賣りは再び口が開けなかつたといふ、成程此鯛は何圓の何錢のといふけれど、その何圓も何錢も皆な人間が取つて自ら助けるので海と鯛は一厘も取りはせぬ、眞のたゞである山もたゞ河もたゞ木もたゞ草もたゞ米もたゞ麥もたゞ牛もただ馬もたゞ、たゞより廉いものはないがこれから算用して見ると滅法界に高いものは人間である、飽食暖衣のその上に花見の月見の茶の湯のと騷ぎ、殊に女は芝居淨瑠璃玳瑁珊瑚珠と滅多に相場を高ぶるがその癖代物には大分損物が多い、親に不孝主人に不忠、夫婦喧嘩や兄弟爭ひなどの大疵は忽ち世間の目に立つ所から大抵は愼

むか、嘘をついたり物に裏表をしたり家業を怠けたり短氣であつたり悋氣をしたり頬膨らしたりの小疵は「何これ位のことは大丈夫だ」とばかり平氣で捨て置く場合が多い全體何うした了簡なのか孔子の語に――天の生ずる所地の養ふ所人より大なるはなし――

とあつて人は世界萬物作り取りの押領司に相違はないからこの上は身分の相場をぐつと引き下げ同じく孔子が――父母全うしてこれを生み子全うしてこれを歸す――といつたやうに身も心も正しく持ち、前いふやうな疵は一切これを改めて親へは孝君へは忠夫婦の間は仲好くし兄弟同士は睦まじくその他世間の交はから家業の勤めに至るまで隨分疵のないやうこの代物に念を入れることこれが肝要である。

幸福の秘訣

例の相談先生假眠の夢から覺めて前なる客をじつと見て、

「貴公も何か相談の筋か、今日は相談所も至つて暇で他に客もないによつて緩り話さう先づ貴公の來意を語られよ」

といへば客は扇ばち〳〵鹿爪らしく口を開く。

「えゝ世の中を樂に暮したい幸福にありたいあはゝおほゝ。おほゝ。と年中笑つて日を送りたいといふこれがなべての人の願ひでございますが、月に叢雲花に風まゝならぬが浮世の習ひとか申しまして眞實この世の中は思ひに任せぬ勝ち、笑ふ日よりも泣く日が多いやうに存ぜられまする、人間この世へ生れて來たのは泣きに來たのではございますまい。何うか幸福に樂しく暮される秘訣がありさうなもの、殊に博學多識の大先生には澤山お持ち合せのお考へがありませうと存じて今日御伺ひ申した次第。何卒御教示に預りたく存じまする」と慇懃に頭を下げる。

執着を捨てよ

翁は、顔中髯だらけが間違つて髯中顔だらけの顔に得意の笑みを湛へて、

「何か翁の持ち合せの幸福の秘訣を示せと斯ういふのか、翁の博學は薄い方の薄學で多識は卽ち駄識ぢやが――龜の甲より年の効――

とやら多年の經驗から會得したものがないでもない。合點が行く行かぬは貴公のこと、喋れば翁の役目は濟む、それでは一通り話して見やう。ずつと近くへ寄らつしやれ」

といへば客は「はい〳〵」と膝を進める。

翁は咳一咳して

「先づ貴公に問ふことがある、貴公の所謂幸福とは一體何んなことかい」

客は稍けげんな顔をして

「手前の幸福……幸福といへば世間一體通り相場がありまして、卽ち金は山のやう食ひたいものを食ひ、着たいものを着、お城のやうな家を構へて數多の下女下男に

侍づかれ、物見遊山はしたい放題、何一つ苦勞がなければそれが幸福暮しといふもの世間の相場の幸福以外特に手前の幸福といふものはございません」

と神經家らしき物のいひ振り、

「世間の相場は姑く措け、それが貴公の幸福なのぢやな」「はい然やうで……」

「否貴公の今の言葉から察するところ貴公は衣食住の榮耀榮華といふことゝ苦勞がないといふことゝを同じに視てをるやうぢやが第一それからが間違つてをるな」

「何故ですか人の苦勞は衣食住の爲めでそれが思ひ通りに行けば何の苦勞もあるまい筈」

「大間違ひ」と翁は一喝して、

「そんな考へでをるによつて貴公は幸福に緣が遠い、世間の金持連中を見渡し給へ彼等は勿體ない程の榮耀榮華を極めてをるが彼等の心中に立ち入つて果して苦勞がないか否か」

――清貧は常に樂しみ濁富は常に苦しむ――

とは古の人の言葉ぢやが世間の金持を見ると成程と頷かれる。

――同氣相求め同類相引く――

の理屈で貧乏な翁の友人は大概似たりよつたりの貧乏者ばかりぢやが、金持と語る機會がないでもない、この頃も或る金持に遇つて御商賣は昨今如何でござる相變らず御繁昌のやうで重疊々々といつてやると、何うして何うして目も當てられませんとの言葉、そりや又何故に、然ればでござる過日棚卸しをやりましたところ半季の儲けがたつた三萬五千兩がつかりしてしまいました、三萬五千兩といへば大した金ぢや何もがつかりすることはござるまいといふと、それは先生の閥目判斷、私の身になると隨分苦しいのですよ何が苦しい、だつて考へても御覽なさい戰爭のお蔭で世間一般の上景氣私の町内でも伊勢屋なぞは去年以來三十萬から儲けましたよ、鈴久が二十五萬彼の八でさへ十五萬なんていふのですもの、二萬や三萬の儲けが何に

なるものですか、町内一の分限者といはれて來た私も今に負けて貧乏仲間へ入るのかと思ふと先生情けなくなりますよ。成程金持は妙な苦勞があるものぢやと大笑ひをしたことぢや、して見るとその男の半季に三萬五千兩の金儲けよりも、翁の一日に五十錢か六十錢の收入りの方が何んなに幸福だか、まあ考へても見られよ、その他相場の高下商ひの手違ひ貸し倒れ番頭手代の費ひ込み、親類の厄介加判の頼まれ類母子の潰れ息子の放蕩嫁の我儘檀那寺の奉加帳やら祭禮の寄進やら、翁なぞの嘗て食べつけない苦勞を食べて、毎日地獄暮しをしてをる者、これが今の金持ぢや幸福でも何でもないたゞ世間の貴公なぞの拜金宗の手合がその榮耀榮華を見て彼等を幸福な人のやうに思ふのぢや、人が然う思ふによつてさては我は幸福なのぢやなと彼等自身にも思ふのぢや、彼等自ら自らを省みて頭の中に苦しみの分子と樂しみの分子と何方が多いかを冷靜に檢べて見たら、彼等は自分を世界一の不幸者として或は翁のこの貧乏が羨ましくならうも知れぬ」

客は俯向いた切りたゞ「はい〳〵」と聞いてゐる翁は更に言葉を續けて、

「一體人間の幸不幸は心の事ぢや、幸福は物にあるのではなくて心にあるのぢや、心の持ち方によつて富んでも苦しみ貧しうしても樂しむ、孔子の弟子の顏回は何うぢや。

――一簞の食一瓢の飲人はその憂に堪へ回ずやその樂しみを改めず――

とあつて九尺二間の裏店住居ぼろ蒲團にくるまつて食ふや食はずの貧乏暮し、それでも顏回は悠々として樂しんでをつたそうな乃で孔子も、

――賢なるかな回や賢なるかな回や――

と言葉を重ねてお褒めなされた。

貴公も幸福が望みとならば幸福はどこ幸福はどこと餘所外を尋ねるまでもない」

「それではどこを尋ねたもので……」

「まだ解らぬか」と焦れ氣味に叱つて、

「貴公の足下にあるではないか、否さ貴公の心の中にあるではないか、心の持ち方を變へなさい。世界中の幸福は皆な貴公のものなのだ」客は數多たび頷いて、

「然らば何う心を持つたものでございませうか」

貴公が現在何んな貧乏暮しをしてをるか、何んなに困つてをるか、その邊のことは知らぬが左に右その境遇に滿足し給へ、いひ換へれば足ることを知るのぢや知足の二字ぢや更にいひ換へれば慾を制するのぢや諺に、

――人の慾には限りなし――

といふ成程その通りで、

「人は自ら足らざるに苦しむ、既に隴を得て蜀を望むともいふではないか、足ることを知れ。

縱し又富貴が得られたにしても慾に限りがない以上、それに滿足することが出來ぬ貧乏人は切めて金が百兩もあつたらと然う思ふぢやろ、幸に百兩の金持になると今

度は切めて千兩と思ふ、千兩から萬兩萬兩から十萬兩、十萬兩から百萬兩百萬兩から千萬兩と何時になつてももう澤山もう充分と思ひはせぬ、一代足らぬ足らぬといふ半季に三萬五千兩も儲けて泣言をいふのが卽ちそれではないか、內心滿足せず足らぬ足らぬでをる以上外見は金持でも心の中は貧乏人ぢやそれが幸福な人ぢやろか、

人間が限りのない人慾に囚はれてをる間は苦勞は年中絕えはせぬ、今年も不幸來年も不幸一生涯不幸續きぢや。人間の不幸は實に慾にあるのぢや」「成程ねえ……」

「乃でお互に慾を制せにやならぬいひ換へれば大概なところで滿足する、足ることを知る、これが大切ぢや、足ることを知れば縱し半厘の錢を持たずとも心の中は悠悠閑々言句の及ばぬ愉快があつて卽ち貧乏人の金持ぢや」

「はい解りました金持の貧乏人になる謀反は止して貧乏人の金持になるやう今後は心がけます。いや何うもあり難うございました」

と立たうとするのを、

「お待ち〳〵まだ少し話があるのぢや」

と引き止める。

「金を使はない金持は却つて金に使はれる、金は儲ける時にも苦勞があり、守る時にも苦勞があり失ふ時にも苦勞があるといふが、そんなに金に苦勞をするのは金に使はれるのではないか、してその因はといへばやつぱり慾の爲めぢや、慾の爲めに心が外物にこびりついてしまふ、心が物にこびりつくのぢや、これを稱して執着といふ」

と咳一咳して、

「世に執着程恐ろしいものはない、女に執着する若い男は女の爲めに親を忘れ家を忘れ外聞を忘れ義理人情を忘れ果ては又我が身をさへ忘れて女と情死する、女と情死して新聞紙上世の笑ひ草になる者は世間に數多例があるが、中には又名譽と情

死する者がある。これは先づ可いとして着物と情死し道具と情死する者も甚だ笑ふべきではあるまいか、最も甚だしいのになると金と情死するのがある。金の爲めに良心を殺し人情を曲げ終には命を失ふ者は今の世の中決してその人に乏しくないといふのが慾の爲めに金に執着するから惡い、女と情死するのは相手が人間ぢやまた恕すべき謂れもあらう。萬物の靈たる人間が賤しい礦物と情死したのでは折角人間に生みつけて呉れた天道に對して濟むまいではないか」

翁の眼がこわそうに光る。

「外物に執着し外物に囚はれてをる中はこの心外物と共に動搖して暫時の休まる折はない。年が年中こせ〳〵せにやならぬ。釋迦や孔子を初めとして古今東西の學者達はこれを哀れんで執着を捨てよ、外物の捕虜になるな、と手を變へ品を換へいと熱心にお敎へなされたのぢやが、悲しいかな凡俗の耳へは入りかねる。然し眞實幸福が望みとならば執着を捨てねばならぬ。執着を捨てゝこそ始めて縱横自在の生活

が出來る。

||富貴に素しては富貴に行ひ、貧錢に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ひ、君子入るとして自得せざるなし||

目となりては色を樂しみ、鼻となりては香を樂しみ、耳となりては聲を樂しめ||

||樂しみたい苦みを止めて天命を樂むべし仰いで天に恥ぢず伏して人に恥ぢざるの生活をなすべし||

これが眞正なる幸福の秘訣である。

富んでも樂しみ褒められても樂しみけなされても樂しみ馬鹿にされても樂しみ笑はれても樂しみ隨處隨時に樂しむといふ縱横自在の生活は執着を捨てゝ後のことぢやさて執着を捨てた後これが解脫である」

「何うしたらば執着を捨てゝ解脱することが出來ませうか」

「最初にいつたではないか慾を制するのぢや足ることを知つて貧富貴賤何れの境遇にも滿足するのぢや」

「何うしたらば足ることを知り得ませうか」

「さあそれは難かしい、序に話して上げたいがもう何時ぢや……六時か道理で喉がぐびぐしをる今日はこれまでにして復たおいで、翁は家業に執着せぬぢやから年中幸福なもの」

「その代りお酒には御執着のやうですね」

「否々酒が翁に執着してをる」

と呵々と笑ふ。

徳孤ならず 必ず隣りあり

人の道

＝間男をせぬを女房は恩に被せ＝

女房のみではない、世の小人は皆この女房同樣、道は我が道であるといふことが篤と決定し得ない所から動もすれば主人へも親へも世間へも恩に被せたい心が出て來る。

「俺はこんなに身持ちを固くして商賣にも精を出し金も儲けて先祖からの家を確かに持ち續けてゐるのに誰も譽めるものがない。感心のしてがない。さて〳〵目のない世間ではないか」

などと不平が出る己れを惱すのは皆これ現金商ひの下心が止まないからである。

丁稚の長吉が隣りの長松に向つて、

「俺の家のやうに忙しい家は復たとあるまい、その上旦那も内儀もそれは〳〵喧し屋で、朝煙草盆の掃除をしてると内儀さんが味噌をすれといふ、すると旦那が何故二階を掃かないかと叱言、二階へあがると内儀さんが髪結を呼んで來い、旦那が醫者へ行け、茶を出せ、それ酒屋へ、それ豆腐屋へと朝から晩まで引つきりなしに追ひ使つてまだ足らず、今朝も旦那がいふには汝も夜は用事がないから些と算盤の稽古でもしたらだつてよ。如何に目が明かないからつて大抵にするが可いや、あんなに働いて夜まで算盤の稽古や手習をしてやつたら先方はよからうが此方で眞平だ」

といつたそうな。

我等如き小人は恰度この長吉と同じで、我が道を何うか人の爲めにしてやるやうに思ふ所から年中苦みが絶えない、こゝに於てか心學の必要がある。心學を修めて我が本心を知り、道は我が道であるといふことを固く心に決定して一生涯何卒無爲の都に遊びたいものである。

斯くいへば何か難かしいことのやうに聞えるが然うではない。それに就いてこゝにありがたい話がある。

昔或る國の村方に河北某といふ醫者があつて息子を道悅といひ、年は二十五六歳父の某は至つて篤實なそして醫術も上手な流行醫者、金もあり田地もあつて有德に暮してゐたが困り者は親に似ない一人息子の道悅である。親の仕込みに手跡も巧に學問も四書五經位は何の苦もなく讀める、怜悧者の癖に又手に餘つた我儘者で夜となく晝となく大酒に色狂ひ時々は人と喧嘩もする、三味線、淨瑠璃、碁、將棋、花も活ければ、尺八も吹くが肝腎の醫者が嫌いと來てゐるから困る、これぞ所謂、

――論語讀みの論語知らず――

書物を讀んでも眞の道を知らないので摺木仲間である。古人の語にも、

――書は道を載するの器――

といつてあるが、書物を讀みながら道を知らぬのは、恰度他所から牡丹餅を貰つた

時、重箱を此方へ取つて牡丹餅を向ふへ返すやうなもの、何と馬鹿々々しいではないか。

これでゐて俺は賢い俺は發明な俺は偉いと鼻ばかり高くなつて世間の人を蛆蟲同樣に見下しとんと恥といふことを知らず親の敎訓も親類の異見も、

――馬の耳に念佛――

――蛙の面に水――

の鼻であしらつてゐる。實に難儀なものである。

乃で親たちは泣いてゐる。

「あゝ〳〵あの放蕩者めは我たちの生きてゐる中こそ人が除けて通しもしやうが、たつた今二人が目を塞いだら嘸相手にする者もなく、この家屋敷は人手に渡るは必定、彼奴は何れ野倒れ死にでもするのであらう」

と先の先まで案じ煩ひ到頭母親は癪を起し父親は心を痛めるばかり實に氣の毒千萬

なもではある。けれど彼の放蕩者には女の笑顏のみが目について親の泣き顏はとんと見えない、何とよく銹びた正宗ではないか、

然し又炭搔きの中から名刀の出る時節もある。或る時その國の領主から諸民敎育の爲めとあつて或る心學の先生を招き國中廻村の道話をさせた。心學先生は村々の寺院庄屋役人の宅で道話をして聞かせ、巡り巡つて彼の村へ來るとそこの禪寺で一七日の間晝夜二席づゝその話をした。何分領主のいひつけである可厭でも出て聞かなければならぬ。道悅も止むことを得ず出席して寺僧に混つて聞いてゐたが、何を感じたのか繩床の前へ出てじつと耳を傾けてゐる樣子が如何にも神妙の體に見受けられる、蓋し名刀がその光を見せかけたのではあるまいか、果せるかな五日目の夜講はて〻夜道悅は役人に向つて、

「何卒先生の前へお連れ下さい」

と賴み、やがて先生の前へ出ると何とも得いはず涙をはら〳〵と溢してゐたが稍あ

つて、

「さても〳〵これまでは大きに心得違ひをしてをりました。廣い世界にも自分程の不孝な我儘な者は他にあるまいと今度の御教訓によつて初めて目が覺めました。あり難うございます」

と先づお禮を述べ、從來に於ける不行狀の次第を隱さず包まず一々懺悔して詫び入つた、これがこれ根が性善の正宗であるからその光がちらと出かけたのである。乃で先生も共に涙を溢して、

「無調法な私の話をそれ程までに眞實に聞いて下さるとは誠にあり難い。御奇特に存ずる、何卒その心の崩れぬやう折角御修行が肝要ぢや。さてその爲めには先づ御兩親へ對して一通り今までの不孝のお詫びをなさるが可い」

と告げた。

道悅は「あり難うございます」

と重ねて禮を述べて家へ歸ると直ぐ兩親の前へ出て手を突き涙を流して、

「唯今までは私の心得違ひ不孝の段々何とも恐れ入ります」

と平詫まりに詫まる、すると親といふものゝあり難さ同じく兩眼に涙を浮べ、

「さて〳〵御領主樣の御仁德のあり難いこと、世界に廢り者のお前が然うした心になつて呉れるとはこんなあり難いことはない。もうもう私等二人は今死んでも思ひ殘す事はない」

と果ては大聲をあげて泣く。

そして母のいふやうは

「だがお前然う俄に氣の折れたのはやつぱり內の精分が弱つて萬一煩ふ下地ではなからうか、何卒體に氣をつけて煩はぬやうに精々長命をしてお呉れ」

といつたとか、後日道悅涙を流しての話である。何とまあ親といふものはあり難いものではないか、惡ければ惡いで心配善ければ善いで心配胸の休まる間とてはな

い。

子を思ふ親の重荷の四つ手駕籠
　　しばし休まん息杖もなし
四つ手駕籠かくあり難き親の恩
　　力を入れてになひ返せよ

道悅は爾來この道へ入つて追々修行の功を積み、道は我が道であるといふことが合點がいつた。するとよくしたものである。面白く思はれた惡遊びがすべて面白くなつて大酒も止み、色狂も止み、却つて天命の家業が面白くなつて來て晝夜精出すので親の胸も休まるわけ、その上起臥飲食の間と雖も父母に對して、

――夕に定め朝に省みる――

の勤めを怠らない、今まで錆びてゐた炭搔庖丁段々研いで見ると元々正宗の名刀であるから光が出て兩共親涙を溢して喜ぶと、道悅も亦何となく心嬉しくなつて亦喜

ばしからずやといふことになる、何と結構な正宗ではないか、道が然う面白くなつて來ると最早止めやうにも止められない。乃で追々行狀が善くなつたに就いて嫁を娶ると夫婦仲も至極宜しい、共々家業を精出し兩親へは益々孝行を勵んだ、こゝに至つて兩親は正に極樂暮し後には隱居して一生涯安樂に世を送つたとのことである。

惡いことは誰でも嫌い、善いことは誰でも好く、皆性善のものであるから生れ變つた道悅を見る人は「奇特なことだ感心なことだ」

といつて今までは口も聞かなかつたのが言葉をかけたり、途中で逢つても見ぬふりをしてゐたのが態々側へ寄る氣になる、五六人の惡友中には自然遠ざかる者のある

一方又道悅に見習つて悔い改めた者もあつたとか、所謂同類相集まるといふわけで自分が善いこと好きになると自然善いこと好きの友が遠方からさへ集まつて來て善い道の話をし合ひ互に助け合ふ心になる、これ程安樂に愉快なことはない。これが

卽ち――朋あり遠方より來る亦樂しからずや――といふ場で實に樂しみの最上である。

さて道悅も家業大事に親切に精を出した所から醫術も進み、父同樣近村の流行醫者になつて自然金も出來る。その金で村の困窮者を少しづゝでも救つたり、潰れた田地を興したり、又村中に何か物いひが出來ると自分の物を出してでも雙方を宥め、なるべく內濟にしてお上へ御厄介をかけないやうに種々世話をするなど實に感心なことである。これまで世界の邪魔をした人が世界の助けをするやうな人となつた。誠の道は何とあり難いものではないか。然しこれは道悅のみではないお互に元々結構な名刀であるから研ぎさへすればこの通りに光が出る、これを研がずに置くと何んな正宗でも摺子木にも劣つた世界の邪魔物にならなければならぬ。この所甚だ以て大事である。

道悅の善行は數年の後領主のお耳へ入つて種々御褒美があつた。その時道悅の言葉

に、

「さて〳〵道といふものはあり難いもの、以前の不孝不行狀とくらべると只今の私の勤めは第一安氣で人も喜び私も樂しみ、その上我が身の爲めになる善いこと盡しをして今又斯やうに御褒美まで頂戴するとは實に勿體ないことでございます。私は何も御褒美に預らうとて勤めるのではない。人の爲すべき當りまへのことだからそれを勤めるまでゃすが全體當りまへのことをして御褒美を下さるなら當りまへでない。不孝不行狀をした時には首を切られても不足はない筈、お上は實にお慈悲なものでございます」といつて涙を流したとか。

又或る時「貴老の心學御修業は何の爲めの御修業ですか」と尋ねる者があると道悅の答に「さればそのことでございます。私も最初心學をしない間は家業などに精出すのは金を儲けて家內を養ひ、家屋敷から諸道具まで何不自由のないやうにして今日を過す爲めとばかり心得てをりましたが、心學のお蔭で眞の道へ入つて見るとな

か〳〵然うでないといふことがよく合點が參つて、殊の外の大安心實にあり難いことでございます。總じて日月が天をお運りなさるにも、天地が萬物をお生みなさるにも、何の爲め彼の爲めといふ爲めらしいことは少しもございません。たゞ人のみはこの爲めといふものがあるから兎角苦しみが絶えないのです。然しこれは道理を知つただけでは駄目、工夫もし修行もして初めてこの通り行くのですから生涯の仕事にこの爲めといふ曲者を打ち殺してしまひたいと存じてさては心學を修行するのでございます」といつた尋ねた人はこの話によりて、

——人慾の私を捨てゝ本然の性に歸るといひ性に從ふこれを道といふ——

ことを悟り得てこれ亦同じ道へ入り熱心に修業して道悅とは無二の朋友になつたさうである。所謂

——德孤ならず必ず隣りあり——

とはこのことである。

何卒道悅の所謂爲めといふ曲者を退治して一生安樂に樂しみたいものである。眞の幸福を得る道は畢竟この外にはない。

心の持ちやう一つ

西郷隆盛、大久保利通、福島大將等は如何にして成功せしや、艱難辛苦を物ともせず奮闘勉强ぜんとの決心と覺悟を以て、倦まず撓まず浮世の風波と闘ひ社會の悲雨慘風のなかを切拔けて十年一日の如くしたればこそ、初めて鳥鳴き花笑ひ百花爛漫たる春の平野に出たのであります。何んぞ安閑然として昨夜は品川で月を眺め、今夜は吉原で花を眺め宵寢するまで晝寢してときゞ〳〵起きて居眠りをする——やうな暢氣怠惰ぐら〳〵然たる、蒟蒻の幽靈が心太の一本橋を渡るが如き精神ならんやです。但し

西郷は薩摩の小祿の家に生れた小倅で、大久保は父が島流しに逢ひ、病氣の母を撫り看病し、夜の明けざるに一里餘りの神社へ參り、父の罪が早く赦されて歸り來るやうにと心を籠めて信心すること三ケ年餘、其の間小さき妹を助けて家計を遣繰りして送りたるが、之れぞ大久保が十六歳の時であつて非常な難儀を致されたのです

又故の奥田市長は二百里餘りの道を破れ着物に破れ笠、野に臥し山に寢てはる〴〵東京へ出て苦勞勉强し、犬養毅は六圓の助敎をし後東京へ出て藤田茂吉の玄關番となり。人より早く起きて家の廻りを奇麗に掃除して水を撒き暇さへあれば本を讀み一二年と經つ中にこれは感心な小僧であると、藤田の眼に止まりて其れより慶應義塾へ通學させられたのです。伊藤博文は貧的にして一丁の豆腐を買ふ錢さへなければ半丁づゝ買つて親子ともく〳〵食べ、乃木大將は寒中着るに綿入なくぶる〳〵慄へて居つた時「希典汝寒いか此方へ來い」と井戸側へ父が連れ行つて手桶で五六杯の冷水を頭から打掛け「何うだ寒いか」と言へば「否え寒くはありません暖かでございます」と答へた父が「寒い時には暖かいと思ひ暑い時は寒いと思へ、人の氣といふものは心の持ちやう一つであるぞ、此の父の言葉を一生忘れてはならんぞ」と言ひ聞かせられた。福島大將も東京へ修業に出て錢はなし、着物はなし寒中ヒユウヒユウ北風の吹く其の中で一錢五厘の燒芋を食ひつゝ勉强し、其の効に因て目出度く學校卒業してベルリン公使館の附添武官となり「ウラル汝我より低きこと五尺なり」とウラル山の絶頂で大聲快呼して例の「嘶く駒に鞭を揚げ踏み行く先は白露の鳥も聲せぬ峰つゞき」と一時非常に歌はれたるシベリヤ單騎旅行を行つたのです。斯くの如き例一々擧ぐるに遑なし、嗚呼山羊四足馬四足豈に我を拒ぐアルプス山あらんやです。

奮起せよ大正の日本男子、

——四十五十は鼻垂れ小僧男盛りは七八十——

——金の事ならくよ〳〵するな稼ぎや嫌でも金は來る——

――たつた一つの氣の持ちやうで泣くも怒るも笑ふのも――

西郷隆盛が拳骨で打たれる

西郷隆盛若き時大勢と一夕酒を飲み、何れも少壯血氣のものどもなれば酒が廻るに隨ひて悲歌慷慨、劍舞を踊り琵琶を彈き其の盛んなること高樓を動かさんとするの光景である。其處で西郷大勢に向ひ我々德川幕府を倒して勤王の旗を擧げんとすれば今後宜しく一心同體となり、肝膽相照して些細の事に短氣を起すことなく、喧嘩口論することなく、互ひに忠告して其の惡しき點を矯正するが第一なり、と坐の中央に起て言ひつゝありしに、突然背後より螺の如き拳骨を揮り上げて西郷の頭を六つ七つ續けざまに打つ者あり、西郷驚き振り返り見れば之ぞ眞木和泉守とて當時チヤキ〳〵

の薩摩の豪傑である。西郷怒氣滿面抑へ難く「これはしたり御無禮であるぞ、如何に和泉守とは申せ武士の頭へ手を掛くるとは覺悟せよ其の手は見せん」と朱鞘の刀を拔いて眞向ふ目掛けて斬り附けんとすれば、和泉守は呵々と打笑ひ「小僧短氣を起して前言を忘れたるか、些細な事に喧嘩口論すること勿れと言ひたるにあらずや然るに其の顏は何だ、其の手は何だ、斬るなら斬れ、眞二つに美事に斬れ、サア然し拳骨位でそう怒るやうでは車夫馬丁と其の量見が同じである。如何で三百年來の德川の天下を打倒して錦の御旗を京都へ押し立つることを得んや」と西郷此の語を聞くや默然として一語なく、呆然として居たりけるが忽ち坐を退き和泉守の下に至り、三拜九拜して曰く「我れ今過まてり〳〵慎んで先生の敎へを奉じ今後決して短氣を起さず大聲を發せず慎みの上にも猶ほ慎んで廣く寬大の德を養はん」とこれより西郷一代の中決して短氣を出さず、喧嘩口論せず大海の器量となられしとぞ、張良は黃石公に辱められても猶ほ怒りを忍びて發せず、大石內藏之介は喜劍に辱

められても猶は忍びて怒らず、神崎與五郎は馬喰に惡口雜言せられても怒らず、其の上詫び證文を書き、太閤は柴田勝家に辱められた上猶ほ按摩の眞似して小面憎き柴田の腰を揉んだのです。和泉守が拳骨を西郷に呉れたのも其の少壯血氣の勇を戒めて其れをしてます〳〵廣大な了簡を養はしめんとしたることは、猶ほ黄石公の張良に於けるが如く、神崎與五郎の馬喰に於けるが如きものであれば、讀者宜しく熟考せられて以て我が身の足らざる所を改められよ。

||怒るやうでは出世は出來ず笑ふ門には福が來る||

||揮り上げし握拳も開くれば可愛と撫づる同じ手の先||

||厭味言ふのも惡口言ふもあなた可愛の心から||

不孝の罰

親を罵つて雷にうたれ、姑を突きこかして忽ち牛に突き殺されし類ひ目前の天罰は

和漢の書に見えたれば是皆人々の知る所、扨又親の罰のあたると月夜の夜のあくるとは知れぬといふ諺あり、人の目には不孝の罰とは見えざれども不孝の罰のあたりし者是又世上に數多あるべし、或は不孝なれども僥倖にして天罰をまぬかれたるも亦あるべし、或る雲の日遠國の俳友訪ねられしを其の主の挨拶に、

||我が世ならお僧とめたし雪の暮||

宗匠此の句を不孝なりとて師弟の義を絶たれしよし聞き及ぶ、いかさま思ひ内にあれば色外に顯れて親のなくばと思ふ底心、早う我が世になりたき味ひ心のすがた句意に顯れ破門せられしもうべなるかな、是等は是心で親を殺せる不孝慎むべき事なり。歌に、

草むらのかげに隱れて住むとすれど
おのがすがたを鳴くむしのこゑ

色こそ見えね香やはかくるゝ、恥かしき事ならずや、又孟子に人を殺すに杖と刃と

を以てせば以て異なる事ありや、曰く以て異なる事なしとあり杖を以て人を殺すも刃を以て人を殺すも殺す所に至つては何で殺すも殺すなり、不行跡なる惡人も現在杖や刃を以て父母の命を取らざれば親殺しとは見えねども、父母の氣を痛め御心を苦むるは、親の胸に釘打つて親の命を縮むるなり、是等は皆是其の身の本を知らざるが故なり、身體髮膚本より父母の枝葉ならずや、深き淵に臨むが如く薄き氷を踏む如く大事に持たねばならぬ。其身を己が心の儘に持ち、酒色に溺れたり遊興に現をぬかしたり、或は又遊所狂ひに身を持崩し大事の家業に勤めずして得がたき財を費し捨つる不孝者も世に又多し、斯る子を持ちたらむ親の心は如何あるべき、何國の親も親の心は同じ事、親は其身の事は思はで其の子の末の末まで案じ、不孝の罰などあたりはせまいが、酒色に溺れて病は出まいか、若し若死はせまいかと夜の目も合はし、又は遊所狂ひに家職を忘れ放埒なる身持を見ては心を煎り、氣を碎き色をかへ品をかへ異見をしても馬の耳に念佛風吹きに灰蒔くごとく終には家督を無に

せん、親先祖への言譯に癈嫡せずばなるまいか、癈嫡しては忽ち非人、其の非人乞食の薦かぶりが不便なとて此儘にして赦しなば家内追付け皆乞食、四五年先にも死んだらば此憂目は見まいにと胸に釘を打たるゝ苦しみ、子故に命を縮むるより現在命は取らざれども一生の内五年か七年親の命を殺すなり、凡夫の目には殺すと更に見えねども天の目には親殺し、恐れても恐れ愼みても愼むべき事ならずや、又論語に父母は唯其疾を憂ふとの給ふ、かりそめの疾ひすら親々の憂ひとなる、況んや重き病ひをや。扨病にも種々ありて尻の重きも疾なり、口の輕きも病なり、夜遊びしたいも病にて朝寐のしたいも亦病、錢かねの欲しきも病遣ひたきも病なり、奢りも病吝きも病、斯樣なる病症數多あれども皆治し易き疾なり、自身に治す心を發さば醫師には及ばぬ、獨り按摩で早速治る。是しきの病でも捨置ては痼疾となり、一生涯除かざるものなり、自身治せば治る病を治さざるも亦病、他人の非は見えよきものにて自身の非は見えざるものなり、とき〳〵我が身を他人にして他人になつて我

が非を見ば病なき人稀なるべし歌に、

人のうへかゞみにかけて見る人の
我が身に成りてなど曇るらん

扨又根を組みたる重き病は一朝一夕にて本復しがたし、孔門傳授の知恥圓を用ふし最れ三敎一致の妙劑なり。

諟の天の明命を顧みる

諟の明命といふのは我人共に持ち合せてゐる本心のことである。本心は自分勝手に拵へたものではない實に天から受け得て仁義禮智信の德を具へ、親に向へば孝、主人に向へば忠、兄弟仲よく、夫婦睦じく朋友には眞實に交はると云ふやうに、何一つ不自由

なく物に應じて自在であるから名づけて明德といふ、卽ち本心の尊號である。

これを譬へれば人に仁義があるのは天に日月がある如くである。天に日月がなかつたなら世界は眞の暗黑白も判らぬ、人も同樣仁義の良心を失つたが最後、親子兄弟夫婦の辨へもなく、主從の區別もつかず、家內一統闇雲暮し實に詰らぬものであるであるから明命を顧みるといつて常に本心に目をつけ無理はしないか、いはないか身慾の爲めに昏みはせぬかと吟味することが肝腎である。古歌に、

雨ならば宿も借るべき夕ぐれに
霧にぞいたく袖ぬらしける

といふのがあるが、その心は初めから雨と知つたらば宿を借りて濡れない用心をするのであつたが夕霧とて目にも立たない、何のこれしきのことがと油斷して、つひ衣服を濡らしたと後悔の歌である。何さま惡いと知つて惡事を仕出來すものはないけれど、明德が暗い爲めに何時しか身最負身勝手に流れて果ては申譯のない大事に

及ぶ、恐ろしいものは身贔負である戒むべきものは身勝手である。

これに就いて可笑しい話がある。越前の某郡平泉寺村とかいふ所に相應に暮す百姓があつて數ある奉公人の中、十五六になる小者尾籠なことであるが毎夜小便を取り外し夜具も疊も濡れ腐つてしまふ。主人は大きに困り入つていろ〳〵と療治の手を盡したが、とんと效驗はなく詮方の盡きた所で一つの工夫を考へ出した。その趣向といふは家の裏に馬小屋があつて馬が二匹ゐる。その小屋の二階が丸竹編みの簀子になつて居ることに氣がついて「はゝあ、あれへ寢させやう」と決定に及んだのである。これがこれ一擧兩得の計なるものである。といふのが越前あたりの農家の馬はすべて牝馬で稱して雜役といひ、秋になると稻をつけたり肥料をつけたりするがその餘は唯馬小屋に繫いで置いて肥料を踏ませる、で彼の小便小僧を簀子の上に寢させて置くと夜中に幾度も取り外す、その小便が簀子の間から瀧のやうに今しも馬の踏んでゐる肥料の上へ落ちる。馬の小便と人の小便が相混じて、こゝに結構な肥

料になる、何と名案ではあるまいか、但し馬は搖らない。よく眠入つた頭の上から折々の大夕立畢竟叱言をいはなければこそである。所が彼の竹簀子は何時の頃に拵へたものやら竹には悉く虫が入つてゐる。それへ夜毎々々の小便であるから腐りが廻つて一夜のこと、すつぽりと簀子が拔けた。何がさて小者は晝間の疲れに正體もなく眠入つて居て二階から落ちたのも知らぬ、迷惑なのは二匹の馬である。溫和しく並んで寢て居る眞中へ思ひがけなく人が落ちて來たので、びつくり左右へ立ち退いて、これは〳〵といつた顏つき、けれども小者は只ぐう〳〵と高鼻馬小屋の中に藁が澤山敷いてある上に、その藁は馬の小便で程よく濕つて居る、小者は蒲團の上へ寢た了簡好い氣になつて眠腐つてゐる。この場合感心なのは馬である。腹も立てねば踏みもせぬ。後足で小屋の板をどん〳〵と蹴つて家の人に知らせ同時に小者の顏のあたりへ、ふう〳〵鼻嵐を吹きかける、小者を起さうとするのである。小者は不圖目を覺した。行燈はなし眞暗がり馬が切りに自分の顏を吹くので膽を潰して

精一ぱいの大聲張り上げ「旦那大變ですよ馬が二階へ上りました早く來て下さい」と喚いたとか。

身贔負身勝手なるもの何と凄じいものではないか、自分が二階から落ちたことは其の儘棚へ上げて置いて馬が二階へ上つたなどゝよくも狼狽へたものである。が斯やうなことは得て人の身にあり勝である。自分の本心の曇つてゐることは夢にも思はないで、たゞ〳〵人が惡い、これが濟まぬと滅多に大聲をあげて喚く人は、この小便小僧の仲間内である。

あざみ草その身の針を知らずして
花と思ひしけふの今迄

各自立ち返つて腹の中を吟味しないと俺がよい俺が賢いで一生を狼狽へじまひに仕舞はなければならぬ。であるから――明德を明かにするに在り――

とあつて兎角本心を曇らせない用心をしなければならぬ。この用心を怠ると私心私

慾身贔負身勝手が焦げついて、この世からなる火宅の苦み聟をいびり嫁を憎み夫を怨み姑を誹るなどの大間違が出來て後には誰も相手になる者がないやうになつて行く、譬へば肥を汲む柄杓の柄の拔けたやうなもので觸るれば汚れる、その儘にして置けば惡臭し何ともはや仕方のない廢れものになる。

兎角我が身を顧みることが肝要で然すれば明德も自然明かになつて來る。人に惡くいはれた時など誰でもむつと腹を立てる、抑も間違の骨頂で寧ろ我が身を顧みるがよい。人には目がある。長いものは長いもの短いものは短いものと世間長短を見損ふ者はない。人が自分を惡くいふのは然かいふ理由があつてのことで、必ず見違へはせぬと心得て我が身を顧みるのがこれ明德を明かにするの近道である。

我といふ心の鬼がつのりなば
何とて福は内に居るべき

我が槌は宝打ち出す槌ぶらで横着者の頭打つ槌

鬼賣り

昔或る家の前を鬼賣う〳〵といつて歩くものがありました。するとハテ珍らしいものを賣る、どんな物だか見せてくれと、大勢集まつてわれ第一に見やうとする　ソレごらんなさいと荷の蓋をとる、ソリヤといつて逃げるものやら、のぞくものやら大騒ぎである。中にも落付いた人が其のやうに喧しくいはるな、マアゆつくり見るがよい、扱扱おそろしいものである。嚙みはしませんか、イエ〳〵滅多に嚙むものじやございません。シテ是は何になるものでありますか、イヤなる所じやございません。人間の百人前は働きます。それは調法なものであるが直段は何程するものです。ハイ代金は千兩であります。ヤアーそれはたいそう高いものであると、いつたばかりで誰

も直のつけてがない。その中に一人欲深い人が居て、私は造り酒屋であるが、藏の人から庭廻り家内かけて凡百人許りである。いよ〳〵百人前の働きが出來るものなら買ひませうが屹度違ひはないですか、ハイ何のうそなこと申しませう。そのかはりいつて置かなければならぬ事があります。此の鬼をつかひなさるに大分工合のある事です。何でも其の百人前の用向きをせんぐりに前廣にいひつけて置かなければなりません。少しの間でも遊ばすが最後忽ち惡さをします。是を無間の業といふて少しも遊ばすことは出來ませぬ。これさへ心得ておれば屹度百人前は働きます。欲深先生はソンナラ買ひませうと、直に代金千兩渡し、扱家内のもの殘らず隙出し鬼一匹に用向きを云ひ付ける、先づ明日の用事がかやう〳〵といひ付け置く、扱翌朝夜の八ツ時分から起きて、こしきの下を焚き藏へ入つて大桶の上でもろみをかき七つ時分になると水を汲み米を洗ひ夜の明け方より五十ほどの碓臼を一どきにがたがたとふむ、糠をふるうかと思へばこしきを取つて藏へ運び莚へひろげ室へ入れて

麹にする、其の間に晝飯を仕舞ひ、跡始末もする、扨酒を樽詰して荷物を造り、しるしをつける燒印押す米屋が來ると相手になつて直をする、船づみする帳合する、その片手に風呂をしかけ火は手のものゆゑ直にもゆる、何でもたつた一人でばたばたと風の吹くやうに働く有樣で旦那殿見て膽をつぶし、扨々千兩は安いものである。百人前の造用引けば半年で千兩は取りかへす、どのやうにしても一年に二千兩づゝ德用がある。十年で二萬兩二十年で四萬兩五十年で十萬兩百年で二十萬兩の金である。それでは金の置き所がないと屈托する位である。扨明日は御客がある。其の用意はかやう〳〵といひ付ける、それを聞くと商賣片手に坐敷掃除玄關あるひは式臺かこひふき廻り、とび石、もり砂、切水まで心をつけて奇麗にするのであります。扨お客がお入りなさると三人前でも五人前でもいひ付けた通りの料理鹽極よくして出すに少しも滯りがない。乃で旦那どのうつゝをぬかしてコリヤ鬼よ〳〵といふて何もかも鬼にまかせ切つてござる。其の後旦那どの懇意なる所に振舞に行き酒

に醉ふておそくもどり明日の用をいひつける事を忘れてその夜はそれなりに寢て、しかも朝寢をせられた。扨鬼は例の通り朝早く起きて何にも用がないから先づ大釜の湯を沸して惡さばかりして居る所へ御家樣が起きて來て、鬼何をして居ると尋ねた所が直に御家樣を引つとらへ熱湯の釜へほうり込み、子供が起きて來たらこれも引つとらへて釜の中へほうり込んで仕舞つた。よくにえた所を引き上げて醬油をかけて喰ふて居る。扨旦那殿は四つ時分にふつと目をあき南無三寶ゆふべねしなに今日の用を鬼に云ひつける事を忘れて寢たが何ぞわるさをしなければよいがと思ひ思ひ起きてあたりを見廻つたが女房も居ず子供も見えぬ、それから庭へ出て木の下へ行つて見れば鬼が火をたき〳〵何やら喰つてゐる。ヤイ鬼よかゝや子供は何處にゐるぞと聞けば、鬼は今喰つて居る所でありますといふ、ヤアーと驚く旦那を又引つつかんで釜の中へぽいとほうり込み又引き上げ醬油をかけて前の通りとう〳〵皆喰ひ盡して仕舞つたといふ事でありますが何とおそろしい恐はいものではありませ

んか。是をよく考へてごらんなさい、慾に目がくれて家をつぶし妻子を失ひ自分の身をも失ふは皆鬼をつかふ故であります。鬼とは何でありませうか、皆さんは考へがつきますか。今此處で鬼といふのは外ではないと思ひます。たゞ我儘にして物事に辛抱が出來ないで飲み食ひと遊び事に耽けるといふ人のことであります。我々も折ふし考へると自分のからだの内に此の鬼がぷり〳〵と頭を動かすやうな事がありますが油斷はなりませぬ。かういふ時は大黒樣の槌をかりて頭をコツン〳〵とやるのも必要だと思ひます。

我が槌は寶打ち出す槌ならで
横着ものゝ頭打つ槌
はる〴〵と安達が原へゆかずとも
心の内に鬼こもるなり
酒くんで三味線引て氣をうばひ

人を取りくふ鬼のおほさよ

猩々の失敗

猩々緋といふのは猩々の血から採つたのが眞染料の猩々緋といふのは猩々の血から採つたのが眞物とのことであるが、その猩々は獸の中でも至つて賢いものであるから、これを採らうとすると海の底へ隱れて中々容易でない。けれど人間の智慧は格別で猩々の好む酒を使つて難なく取捕へてしまいます。

でその方法といへば酒の入つた瓶に柄杓を添へて幾つとなく海濱の草原へ列べ、それから草を生へた儘結び合せて沓の形を作つて置いて、番人は遠方に隱れて見てゐる。すると酒の匂ひが海の底へも達くと見えて猩々共は頻りに鼻をひこつかせ到頭

堪へられなくなつて、

「おい〳〵好い酒の匂ひがするじやないか何と揚つて見やうぢやないか」と一匹がいふと、他の猩々がかぶりをふつて、

「否々滅多に揚られないぞ俺たちを醉はせて置いて捕虜にしやうといふ人間の計略だからな」といふ他の一匹が、

「何飲みさへしなけりや可い、此處にゐて海の青臭い匂ひを嗅ぐより彼處へ行つて酒の香を嗅いだ方が何程得だか知れやしない」

「然うとも〳〵嗅ぐだけなら大事はあるまい行かうよさあ來い〳〵」と一同が賛成して、ぞろ〳〵と酒瓶の側へやつて來る、すると海の底から遠く離れて嗅いだのとは又格別その匂ひといつたらない猩々共は鼻をぴよこ〳〵させながら瓶のあたりをぐる〳〵廻つて、

「いや何うも堪らないね何と一杯づゝ飲まうぢやないか」と一匹がいひ出すと他の

一匹は、

「否々滅多に手は出せないぞ」と止めるけれど一同は、

「何柄杓でがぶ〳〵やれば惡いが指につけて少しづゝ嘗める位は別に差閊へはなからうぢやないか」

「然うとも〳〵」といふやうなことで各自指につけて嘗める嗅ぐとは又一段である。

そこで一匹が、

「嘗めたばかりぢや何だか物足りない。柄杓で飲んだとて腹一杯飲みさへしなきや醉ふ氣づかひもあるまいから何と醉はない程度に飲まうぢやないか嘗めたばかりぢや却つて氣を惡くする」といふと、

「眞實だ飲まう〳〵」の聲が起つて少しづゝ飲んでゐる中に又一匹がいふのである。

「醉へばこそ酒の價値があるといふわけ、それにこれまで捕れた猩々も醉つた上にそれその沓を穿いて踊たものだから轉んで人間の手にかゝつたのだ、踊りさへしなけりや醉つても大事はないと思ふね」

「然うとも〳〵」と今度は一同がぷ〳〵やり出す、その揚句ひどく醉つてしまふと何ういふものか沓が穿きたくなるそうだ乃で一匹が、

「何うだい沓を穿かうぢやないか何踊りさへしなけりや轉ぶ氣づかひはあるまい。歌だけ歌つてゐやうよ」といひ出す一同それにも賛成して沓を穿いて手拍子を取つて何やら歌つてゐると今度は足拍子が取りたくなる。

「轉ばないやうに足拍子を取つたら何うか」

「面白い〳〵」と足を上げたが最後忽ち轉んで哀れ人間に捕られるのであるといふ。

この猩々ばかりではない廣い世間を見渡すと我が日本にも澤山ありはしないか、色

も酒も慾も奢りも皆恐ろしいものと知りながら眞實その辨へのつかない所から、何この位のことがと思ふ油斷が積り積つて終には命までも取られてしまふ實に氣の毒なものである。

若い人たちは殊に色を戒めることが肝腎で此處に面白い話がある。昔吉原に花扇といふ名高い遊女があつた。これに尻毛を拔かれた者幾人と數限りのない中に或る猩猩連があつて何れも酒に醉ひ世間話から自慢話に移ると、

「いや誰が何といつても我には敵ふまい拙者こそは當時全盛の花扇と二世の契をして起請を書かせ指まで切らせた男でござる、えへん色男には誰がなる」と一人がいふと又一人が、

「否そんな筈はない。その花扇は我には命でも差し上げるといふ起請を書き尙ほその上に小指を切つて呉れてゐるえへんお前にそんな出鱈目をいはれてたまるものか」

「何出鱈目なものか、それこの通りだ」

と守り袋から小指を恭しく取り出して見せる起請も成程花扇の自筆である此方は大きに驚いて、

「これは可怪しい」

と懐中から取り出したのは干大根のやうな指起請文も寸分の相違がない。二人が呆れてゐると傍の老人、

「それは不思議ぢや私もこゝに持つてをるぞ」

と珠数袋から出しにかゝる向ふの隅の男も、

「待て〳〵我にも覺えがある」

と紙入から取り出す後について他の一人が、

「して見ると我れのも何うか疑はしいぞ」

と煙草入から出したのは同じ小指に同じ起請である。五人は膽を潰して、

「何程全盛の花扇でも小指の五本もあるわけはない」「巧く欺しやがつたな」

と驚き呆れ腹を立てる、何と馬鹿げた譯ではないか、といつてこの指まんざら干大根では誰も合點しないが、昔はそれがあつたもので、お仕置になつて罪人の死骸がその儘取り捨てられる非人が行つて小指を切り取り貝殻に入れて遊女などに賣る。遊女は起請に添へて客に贈るといふ寸法、然うとは知らず罪人の小指を守り袋に入れて頸にかけて喜ぶ、いやはや恐れ入つた猩々ではないか。

五人は腹が立つて堪らないので花扇の女め赤恥を掻かせてやるぞと彼の樓に行くや、二階へ通り各自の起請に小指を括りつけ鴨居へ貼り列べて力み返つて待つてゐると、花扇はしづ〳〵とそれへ出て、

「これは〳〵皆さんお揃ひで好うこそお出」

といはうとするのを、

「否今日は好く來たのぢやない。惡く來たのだあの鴨居を見ろ、人を馬鹿にするに

も程があるぞ畜生め汝に小指が五本あるか」

と怒鳴りつける。

流石全盛の花扇も顔を眞赤にして暫く差し俯向いてゐたが、漸うと顔をあげ涙を流して、

「そのお腹立ちは御道理でございます何ともお恥づかしいわけ、此の上は皆さんへお詫びの爲め妾の身の上話包まず隱さず申しませう何卒お聞き下さいまし」

と嘘と眞をこき混ぜて悲しい身の上を話した末に「一人でも多くお客を取つて此の家へお金の儲かるやう嘘を上手に商ふのが今の主人への妾の奉公、それ故妾が眞實に切りましたのはこれ此の左の小指一本だけで其の他は皆贋指でございます。實を申せば只今こゝにお出でのはたつた五人だけですけれど、江戸中へ配つて置いた指の數は何本やら數限りがございません。妾もこんなに年中嘘を商つてをりますから未來の程も恐ろしく、可厭な事とは存じながらそこが苦界の身の悲しさ、何卒不

便と思召してお恕しなさつて下さいまし」

と一應五人を宥めて置いて、

「のみならず斯く五人もお揃ひの席では何方と指しては申されませんが、あの五枚の起請の中たつた一枚眞實心に思ひ込んで、これこの通り小指を切つて差し上げたのがありますのにその、方までも胴慾な嘘か眞かお心に大抵覺えがありさうなもの他の方と同じやうに疑い深いなされ方は妾怨めしうございます」

とわつとその場へ泣き伏した。

すると此方五人は貰ひ泣きして各自心に、

「ほんに我には何時ぞや斯ういつたことがある。否あゝもして呉れた。して見ると今花扇が眞實の分といつたのは我のに相違ない」

と期せずして同じことを思ふ。

乃で鴨居に貼つた彼の起請と小指とを各自取り、違へないやうにそつと剝がして

懐へ入れて、

「皆さんお先へ」「はいさやうなら」

と思ひ〳〵に扇屋を出て二三丁も歸つた所で一人が「何でも我に相違はないが、この儘歸つてしまつたら花扇も嘸情なく思ふだらう今一度一寸逢つて歸るとしやう」と後へ引き返すと他の四人も同じ心で同じやうに引き返しぱつたりと扇屋の前で出遇つたとのこと。

何と滑稽な猩々ではありませんか相手は誑すが商賣であるから無理もないが各自の己惚から陥り込んで命を取られる猩々である。

これを聞いて唯一場の作り話笑話とのみ思つてはならぬ。各自腹の中へ立ち返つて見ると、これに類したことが誰にもよくある。此の位はまゝよあの位は何のことゝ追々深陥りして後悔することあり。

であるから唯本心を知つて人の道を早く辨へなければならぬ。道を知つて之を行へ

ば萬物の靈であるが、道を知らなければ萬物の糟である。それでは折角生みつけて呉れた天道に對して濟まないのである。

金平糖を摑んだまゝ

兎角善いことは見習はない、旨人主人や親の意見は耳へ入らない。豐仕事嫌ひの腰拔けが世間には隨分多い、それでゐて、やつぱり俺が俺がで家内の者を叱り廻し「こんなに氣をつけても家内がとんと治まらない」と歎息する、その筈主人も奉公人も女房も子供も親大事といふ調子が定まつてゐないから家が面白く行かないのである。

といふのが本心か暗いから身が治まらない。兎角心の洗濯が肝要である。衣類の洗濯に絶え間があると盥の中に子子が湧く、心の洗濯に絶え間があると家内にいろい

ろの蟲が湧いて主人も女房も丁稚も下女もぶり〳〵いつて跳ね廻る、先づ第一には世間の人が馬鹿に見えて自分一人賢く思はれる、自分の氣に入つた人は善人のやうに思ひ氣に入らない人は惡人として斥ける、自分を賞める者は輕薄とは思ひながらも何となく快いが毀る者は道理と知りつゝ横目に睨んで忌み嫌ふ、人の能があるのを妬み、人の出世を嫉み、人を困らせ、自分を高ぶり、口には正直なことをいつて蔭では身勝手を働くなど皆これ心の洗濯の絶え間から湧いた虫である。油斷のなつたことではない、孟子の說に、

||堯舜は性のまゝにし湯武は之に反る||

とあつて堯舜の如き聖人は生れながらにして知り、安んじて行ふ人であるから特に愼まずともその身その儘聖人である。既に湯王となると日に新たに日々に新たにして愼みに愼みを重ね間斷なく勤めて終に生れつきの明德に立ち返り、初めて聖人となることが出來る、であるから書經にその德を賞めて、

||諫めに從つて逆はず人に與して備はらんことを求めず、身を檢むるに及ばざるが如くす||

といつてある。これを見ても湯王が偏に明德を省みて日々に新たにするの功を積まれたことが判る、湯王でさへ然うである。況してや一般の者が愼みもせず氣隨氣儘に事をして碌なものにならないのは不思議でも何でもない。人が斯やうな難作者になるのは畢竟幼少からの習慣である。障子を破らせないと虫持ちになるの叱つたら虫が出やうのと親が子供を氣儘にさせて置く、するとその癖がついて成人の後人の意見も聽かず、人が自分の思ふやうにしないといつては癇癪を起し自分一人賢こがつてこの上もない者のやうに心得、終に本心を炭團玉に仕替へることは品玉よりも尙ほ速い。

||嚴家の子は嚴を知らず||

とあつて嚴しい家に育つた子は嚴しいことを知らない。氣儘者を急に改めさせやう

とすると癇癪して物蔭へ引込んで泣いてばかり居るやうになる、これといふのが、

――その親愛する所に於て僻す――

といつて畢竟可愛々々の、とんぼかへりをして育てたその誤りである。人の子は敎へずとも人になると思ふのは大間違の骨頂である。譬へば米麥を蒔けば米麥が出來るに違ひはないけれど肥をし草を除りさま〳〵の手入れをして初めて實を結ぶ。人の子もこれと同じことで產み放しにして敎へもせず捨て育ちに育てあげて置きながら人らしいものにならないからと叱言をいふのは些と無理ではあるまいか、斯やうな大病人は全快が難かしい俄に手習は出來ず本を讀むことは嫌い、さて何うしたら療治が出來るか、幸ひに此の心學は無學文盲でも出來る學問である。一たび本心を見つけると生れつきに無理のないことが判る。

この無理のない心を手本として物事をすれば身分相應の働きが出來て卽ち人並の人になられるのである。であるから老人と雖もやはり修業をするがよい。尤も文學は

要らぬといつて學問は無用といふのではない。

――行つて餘力あれば則ち以て文を學ぶ――

ともあるから暇のある者は精々書物を繙くがよいが、たゞそれ親に事へ主人に事へ日用に追ひ廻はされ而も人に損をかけまいと思へばなか〳〵書物を讀む暇はなし、といつて學ばずには居られないといふ人は切めて心學でもして大した無理をしないやう平生心がけたいものである。

敎へは時を知ることが第一である。寒中に種を蒔いても物は生へない、これ時節が違ふからである。人參は結構な藥であるけれど二階から落ちて目を眩したのには間に合はない、家業の忙はしい商人などには、この心學が恰度よい敎へであるが困つたことには各自一つ摑んでゐる物があつて志が立て難い、摑んでゐるといふに就いて面白い話がある。或る老人婚禮の振舞に行つて南京の古染つけの壺に手を入れて金平糖を摑み出さうとすると、さて出ない何とか拔けまいかと狼狽へて引つ張つ

て見るが、ます〳〵手頸は固く結つてしまつて何うにも拔けない、居合せた五人組の人が氣の毒がり此の壺が何程高價な品にも致せ御老人の手には替へられますまいといひながら向ふへ廻つて「さあ壺をお出しなされ」と手にした煙管を斜に構へた老人氣の毒に思ひながらも、

――脊に腹は替へられぬ――

壺を冠つた手を差し出すと、はつしと打ち下す煙管の下、壺は碎ける金平糖は散る座中一面落花狼籍の體である。一同ははつとして、

「御老人お助かりなされたか」「やれ〳〵」と其の手を見ると拔けぬも道理老人は手に一ぱい金平糖を掴んでゐたとのことである。

何と可笑しい話ではないか、掴んだものを放しさへすれば自由自在に手は拔けたものを、一度掴んだが最後手がむしれても首が千切れても何としても放すまいといふ片意地な生れつき、それが爲め自由自在の大安樂が出來ないのである。斯くいへば

錢金のことのやうであるけれど掴むものはこれのみではない、縹致のよいのも掴み賢いのを掴み、負け惜みを掴み、家柄を掴み、身代のよいのを掴んで固く放すまいとし擔ぎ歩く所から教へを聞くこともならず、樂をすることもならず、慎むこともならず、詮方なさに癪を壓へたり、顏を澁めたり、酒を飲んで紛らしたり、然りとは氣の毒なものである。壺を割つてしまつてからは何といつても詮ないことである身代の壺を割らない裡に用心が第一ぢや。篤と注意をするが可い。それに關はらず「俺の本心は明かだ明德は曇つてゐない何洗濯が要るものか」と强がる者が往々ある。何と氣の毒なことではないか、これ皆本心を見失つて身勝手な心を本心と思ひ込み、洗濯しやうとも愼しまうとも思はないのは明德の曇りであるから人も我もこの晴曇を吟味するのが肝要である。

禍は必ず蕭牆の中より起る

織田信長が明智光秀に殺されて後家來の者ども何れも清淵に會合して其の相續人を立てんことを會議せし其の夜、宴會ありて各々酒を呑みて醉ひける中に柴田勝家、正面の中央に座して手枕しながら、當時日の出の勢ひありて柴田を壓倒せんとする秀吉に向つて曰く、

「のう羽柴殿十餘年前の事を思へば可笑しき事どもあり、其の折貴公は二合半の藤吉郎で拙者は折々按摩を貴公に賴みしが偖て近年拙者も年老いて力弱くなりたれば一入按摩欲しと思へど、貴公は今や諸大名の列に入られし爲め按摩して呉れと賴みがたしと思へば人の身の上ほど浮沈榮枯のあるはなきものぞ」

と秀吉を尻目に見て輕蔑し悪弄しければ並居る一座の面々隨分言ひ過ぎたる柴田の詞なるかと心の中に思へども、勝家の權威に懼れて敢へて言はず、時に傍より勝家の甥なる佐久間玄蕃進み出で秀吉に向ひ、

「實に柴田殿の言はるゝ如くなり、貴公昔の事を忘れずば早く柴田殿に對して按摩をしてやるべし」といふ。秀吉は斯くは此の秀吉に向つて無禮千萬の詞を吐くかと一度は無念に思ひたれど、

――一人の下に屈して能く萬人の上に出づる――

との格言は此處なりとて直ちに氣を取り直して之を諾し、自ら素襖の袖を廣げ、柴田の傍に行つて其の肩より足の爪先まで丁寧に能く揉み摩りて後ち、御機嫌は如何と挨拶して元の座へ立ち還れば玄蕃此の樣を見て秀吉の傍に寄り進み、

「貴公は何たる事ぞ、今は關西探題職の尊き身を持ちながら、人の足腰を揉んで卑人同然の按摩をするとは呆れ果てたる人なるかな、第一に之れ主君より賜はりた

る官爵を卑うするといふものぞ、苟くも縱令へ一命を捨つるとも武士の爲すべき所業にあらず、然るに貴公が今其の辱めを忍ぶ所を察するに心中大なる企てあると覺えたり、若し果して然らんには諸大名の目前に於て先づ拙者と勝負を決せよ」

と疊みかけて詰め寄れど秀吉少しも動ずる色なく且つ徐ろに答へて曰く、

「成程貴殿の言は當然なれど而し拙者熟々古今の事を考ふるに、禍は必ず蕭牆の中より起るものなり。今天下鼎の如く湧き立ち、我君信長公一たび天下を併呑せんと欲し給ひ、其れが爲めに微賤の我等に至るまで犬馬の勞を竭せしに、事半ばならずして川智の爲めに殺され給ひしより四方の强敵何れも光れる眼を鋭うし、尖れる牙を鳴らしつゝ當家の隙を狙ひ、當家は今や風前の燈火の如く危うし、而も幸ひにして柴田殿を始めとし不肖の拙者等まで斯く列び居るゆゑ敢へて侵略せられずして日を過しつゝあり。さりながら一小事を楯に爭論を致して內亂を釀すやうなことありては却つて先君信長公の鴻業も此に盡くるに至らん。殊に拙者は微賤より起りたる

者で其の受けたる大恩や到底諸大名と同日の論にもあらず、故に按摩位は愚か縱令ひ履を頭に載せられ打ち打擲せらるゝとも何の厭ふことかあらん。これ唯全く先君信長公への御奉公のみと思ふまでの事なり」

と諄々として說く所理に適ひけるが爲め、有繋の玄蕃も秀吉の堪忍の强きに驚歎し閉口して默然たり、斯くして秀吉は遂に身に懸る危難を免るゝを得たり。之れ柴田と玄蕃と按摩をしかけ按摩すれば又辱めて之を殺さんと企みたる計略なりとは後に於て知られたり。

眼鏡屋の頓智

堯のまねは堯ならくのみ、跖がまねは是盜賊にて人の性は善なれば其のよる所其の緣にひかれて本懼の明をくらくも迷ひ失ふなり。

まねをせよ主人へ忠義親へ孝怠らざれば誠とぞなる

それに就いて可笑しき話あり。昔都方に目鏡屋あり。此の亭主古今まれなる變者なりしが或る夜此の家へ盗人來り表の半戸を一尺許りこぢ放し、破り置きしを翌朝見て、家内の者の驚きしを亭主見て少しも騒がず、此の盗人必ず我方へ今兩三度は來るべし我是をなぐさまんとて、其の夜から和藺の虫目鏡の秀れてよき、大きく見ゆること髪の毛が千石船の檣ほどにも見え、蚤や蟻が牛馬ほどにも見ゆる虫目鏡を張り置きしを知らず、此の夜又盗人來り、是よりのぞき見て肝を潰し、扨も〳〵此家こそ奇妙なり。彼れを見よ彼の寢て居る者は京の大佛の釋迦見るやうな大體なり、殊に臺所に寢てゐる下女が尻は泰山にもまさる、是にてしきつぶされなどしては適ふまじ。逃げよ〳〵と逃げ歸りて首盗に語りしかば、首盗いかりて汝等恐るゝまゝに狐狸に化され來りしなり

今夜行きて見とゞけ來れと大に怒りしかば又々盗人目鏡屋へ向ひぬ。扨又目鏡屋の亭主は嘸々昨夜は賊ども肝を潰せしならん。今夜は何目がねをかけて樂まん。此度は十三めがねといひて此の目鏡をかけて見れば、何にても十三づゝ重ねかゝりて見ゆるを掛け置きしを知らず、盗人ども來り、さしのぞきて大に驚き肝を潰し、さてもさても今夜は夥しき仰山なる人數にて、人の寢て居る上には又寢所しては寢、低き鼻の下女は低き鼻の人許りをかさね、揃へ戸も襖も障子も皆十三枚づゝ重ねかけ煙草盆茶碗火鉢も積み重ねかけて虚空にまで滿々たるは、あな恐しと逃げかへりて申しければ、首盗今は不思議をなし、今夜は我直に行きて見るべしとて自分目がねやへ出で來りぬ。扨又目がねやの亭主は今夜は何目がねをかけて肝を潰さすべき、此度は遠目鏡こそよかるべきと思ひしが、いや〳〵遠目鏡にては近く見えて面白からず、是を遠く見するが面白しと、遠目がねをかへして裏を表となし、張り置きしを知らず首盗來り此處よりさしのぞき大に肝を潰し、手下の者を叱つて申すには己

等彼の向ふに見ゆる目鏡屋へ這入らんとて此の半戸を破り、茲から仕かけて五年や八年に彼の目がねやまで行きつけるものと思ふかと散々に罵りけるに、手下の者驚きて如何なる事と尋ねしかば首盗申しけるは己等も眼を開きてよく〳〵見よ。彼の目鏡屋は何程近くても五六萬里は大丈夫ありと申せしとか、此の咄し可笑しきよき譬にて、世の人皆々本體の明といふ心の眼は常に明かなれど、時として色といふ目鏡欲といふ目鏡、いかり腹立ち悋氣嫉妬といふ目鏡、不義非道酒食遊興といふ目がねを掛けられては近き主親も中を隔て遠く見え、親しき夫婦兄弟朋友の間も遠くなり。其の厚ふする所のものも薄くなり。其の薄かるべきものが却つて厚くなり。佛の示し給ふ衆生轉動さくらんして皆々我を亡し失ふなり。故に孟子は學問の道他なし其の放心を求めるのみとさとし給ふ。皆此の放心といふ目がねの爲めに本性の眼をくらますことでございます。此の放心を求むるには只文盲に堪忍致すがよいと

――忍德齋――と申す老人が申されました。此の忍德齋と申す翁は堪忍長者と世の

人よびし人なり。其の譯は此の忍德齋常に堪忍大明神と書きし一軸をかけ置きて朝夕に此の神を信心いたし、萬のことをよくも〳〵堪へ忍び堪忍し、又平生に人に語り示されけるは、我は家富み斯く壽も長く子孫多く目出度も皆堪忍の神のお影なり其の譯は我十七歳の時に或る大德の和尚に見えて申しけるは、一代放心をせず眞實の學問を心安く御さとし給はれと願ひしに、和尚の申し給ひしは只堪忍を致さるべし。忍の德たること持戒苦行も及ばずと佛の給ひぬ。又此處を娑婆世界といふ、娑婆の飜譯は堪忍といふことにて兎角世界は堪忍なり、娑婆卽ち淨土といふも堪忍すればそれがすぐに極樂なりと申す事なり。堪忍とて腹の立つをのみ堪忍するばかりじやない。欲の貪りたきも堪忍、色欲もつよく堪忍、酒食の過るも堪忍いたし、いかりはら立ち短氣悋氣は元より堪忍々々、朝の寢むたきも堪忍して起き、灸治のすへともなきを堪忍してすへ、家業にうとく遊びたきも堪忍いたし、學び事の怠り安く倦みつかるゝも堪忍して守るべし、かくの

如く此の堪忍を主とするが是放心をせぬ術にて、すぐに是が敬以て内を直くし。外不義に至らぬ徑捷なり、又汝に與ふる良藥あり。是を生涯呑み得ば長命富貴子孫榮ふべし。其の妙藥といふは外にもあらぬ堪忍丸なり。此の良藥は則ち堪忍大明神の神方なれば日々夜々に堪忍大明神々々々々と唱へて、堪忍丸と息を呑み込み禮にあらざれば堪忍して言はず、禮にあらざれば堪忍して見ず、聞かず、禮にあらざれば堪忍して動かず、己に克つの堪忍をつよくして生涯此の良藥の堪忍丸を寸陰も怠らず用ゆるが是眞實生きて働く學問にて放心を求むるなりと、さとし給ひしぞ世にありがたし、此の老年に至りても守り怠らざるのお影なりと語られしとなん。又或る翁此の忍德齋が示しを傳へ聞きて感心の餘り、是にならひて常に堪忍大明神の一軸をかけて信心し此の前に錢箱を拵へ置きて――堪忍箱――と名づけ十錢が今日の洒肴し入用なるときは九錢にて堪忍し、殘る一錢を此の箱へのぞきおき、又十圓入るべき衣服なれば、九圓にて堪忍致し跡の一圓を此の箱へのけ置き、又百圓入るべ

きの普請や作事は九十圓にて堪忍致し、跡の十圓は此の堪忍箱へ入れ置き、萬大小となく何事も入用に應じて一割二割づゝ堪忍して此の箱へのけ置き積金を拵え、扨毎年正月二日に一家一門出入の者を招きて酒飯をあたへ申さるゝは、今日は堪忍大明神の御神事祭りなり今日より、先づ互に堪忍の致しぞめいたすべし。扨御覽の如く例年とも床に堪忍大明神の一軸の隣に掛け置き候萬歳の書は世間にて徳若に御萬歳と申し候へども、我方にては徳は堪忍御萬歳君も榮えます。親も榮え子も榮え夫婦も兄弟も家來も朋友も榮えますものは堪忍の徳にて御座候へば、御互に徳は堪忍なる事を知り行ふて五萬歳も百萬歳も榮え申すべしとて、扨右の堪忍箱にのけ置きし金子を出し窮なる者ほど澤山にあたへて曰く、此の銀はかねと思ふべからず、是は即堪忍大明神の御神體なりと大切にいたし、神儒佛を尊み家職を大切に御法度を慎み守り、色も欲も酒も奢も吝も堪忍いたし、慎み短恪氣遊び拡きを堪忍致し、只何事も堪忍なりと心得べし。我は忍德齋老君の徳の孤ならざ

るにあり難くも隣して斯くもめでたく榮ゆるなり、各々方は又我が堪忍を守る心に隣して德をつみ、不孤も必々子孫へ永く傳へ給へと申されけるぞいみじき。

又むかし忍觀と申す和尙ありしが、世の人にさとして常に堪忍の德をのべ、南無堪忍佛〳〵と唱ふれば忽に佛となるなりとすゝめけるを、此の國の大守或る日忍觀和尙をよび、わざとなじりて和尙は人に堪忍をすゝめ人の性は佛にて生れつきには短慮短氣はなきものなりと申すよし、人をあざむく不埒なり、我は生れつきての短氣肝癪にて、いかやうに致しても少しも堪忍のならぬ生れつきなり。然るに汝堪忍致せば致せるもの抔と人をさとすぞ迷僧なる、汝實に道德あらば我に堪忍いたさせ見よ、汝是をあやまたばゆるさじと大にいかり給ひしかば、忍觀答へて申されけるは大守樣には御若き頃は至つての御美男にて其の上格別の御風流御立派を好み給ひしよし、左樣にもあらせ給ふやと尋ねしかば、

大守のの給ふは如何にも我は格別の立派好にて少しにても見ぐるしきことは嫌ひにて勸忍せずと申し給ひしかば、

和尙笑ひて其の見ぐるしきことは御きらひにて少しも堪忍し給はぬと申し給へども御齒もぬけ御頭も白く皺もより御腰もかゞみ御色も黑く、かゝる御見ぐるしき姿とゝ

っぜ給ふは何故に堪忍は致し給ふぞ、又此頃うけたまはりしには、御途中にて大雨にあひ給ひ、全身共に御ぬれさせ給ふのみか、折節雷落ちて御駕籠をくだき破りしとぞ。是などは何とて其の儘に堪忍を仕給ひしぞや。急度いかり給ひ御堪忍なく雷雨ともにきびしき御とがめ御仕置きもあるべきを、只それなりにての堪忍はいぶかしく存じ候なり、又當春遠路をわざ〳〵花を見に行き給ひしに、花未だ咲かずとて御歸りありしが君のわざ〳〵遠路をまかり給ふに咲かざる花は不埒無禮なるに其のまゝにして此の花には御とがめもなく堪忍をなし給ふにはあらずや。君のみならず、すべて世の人我は堪忍はせぬの一寸もひかぬの抔と申せども天然仕方のなき事には自然と誰もよく堪忍を致すものなり。是にて見給へ短氣短慮は皆己が氣隨氣儘

にて我がおもわくの一念なり。其しるしには我は生れつきての短氣もの肝癪もちなど丶覺悟してゐるで、かりそめの事にも腹を立てるなり。其又短氣肝癪も御目上の方や、又我が恐る丶人には肝癪も短氣も出さぬは其の人に出してはあしくすまぬと覺悟して居る故にいでぬなり。又我が妻子家來目下には氣隨知慮を出しても苦しからずと兼て心得がある故に出るなれば、かなしいかな皆一念の迷にして我が本性を知り給はぬが故なり。君も我に同つて堪忍をせぬとの宣ふ。無道をば君が恐れ給ふの御目上の方に申し給へよ、又短氣に御生れつき給ふならば君が御立派好み給ふの御身にてかゝる御年御つもらせ給ひて世にも見にくき御姿とはなせにならせ給ひぬと答へけるに、大守始めて夢のさめたる如く我が身に立ち歸り、是より大に柔和忍辱とならせ給ひぬ。是迄の氣隨知慮の地獄をのがれ、心身ともに我のみか人までも共に安樂世界に生れしも堪忍佛の濟度なりと悅び、忍辱和尙をまゝ〳〵信じ給ひしとかや、誠に〳〵此の和尙が論面白きことにて高きもひくきも此の堪忍こそ大事にて、西へ行くも東へ行くもたつた元はわづかなる一足一念にて、我に歸り見るか、我にかへり見ざるかの其の一念が身をば起し又身をば失ふ、此の一足が大事なれば各々方も三足跡へ立ちかへる場が學問の肝要でござる。

堪忍のなる堪忍はたれもする
ならぬ堪忍するが堪忍。

今のみと思ひて
父母に事へよや
後な頼みぞ
知れぬ世の中

三人づれ

世の中の親ある人も親なき人も我が一念の心得にて孝行はなるものなり。大和の國に喜助といふ孝子あり。父母に分れて後は我が身を常に三人づれとしてます〳〵孝心あつかりし、其の三人づれと申す譯は父は天なり、故に心すぐに是父なり母は又地なり故

に此の身はすぐに母なり、此の父母を預り奉るが我なり、故によき方へ近より父母によきことを御聞かせ、御見せ申さねばならぬなり。又あしき方へは人がいかやうに同伴しやうと申しても、大切な父母をあしき方へつれまし行くことはならず、人が腹立てさすの無理をいふても父母に腹は立てされずと、堪忍いたし何ほどうまき食味にても、よけい食べて父母にあたり御不快になりてはならぬから御養生を致させまゝ、又心得違で一念迷ひ、いろや愚痴などを起して人に父母をあしくいはせてはならず、其の上に天命にそむかせ又地獄などへ父母をやりましてはならぬ故になるたけ善事陰徳をなして極樂へも又々三人づれにて參りますと樂しんでゐますと申されけるを聞くもの皆感涙して此の德にこそ隣りいたしぬ。此の孝子は孝心のみならず道學に志しふかく手島堵庵を信じよく人をさとし敎へられぬ。予(脇坂義堂)が十四歳の年我が家に一と夜やどらせられし時に、予が父なる人の此の孝子に尋ねしは、君は二歳にて父にわかれ給ひ、八歳の頃よりよくも母に事へて世にも知られ

給ふの孝子なり、何卒よく親につかふる敎へをなして給へと申されしかば、孝子赤面し中々私などは孝行などゝ申すことは勿論今母が御存命のありし事どもを思ひ出づれば、此の時はかくも致し侍りしなば猶々よろこび給ふべし。又何時の頃は艱難手がろく致しなば反つて御心も安からせ給ふべきにと、さま〴〵の行きとゞかぬ事のみを常に思ひて、かなしき事の數々に不孝の罪を悔むのみなり。しかしながら我十一歳の時に眞實に母の大切になり。又世の中の常なきを知りて萬の事のつとめ安きを發明せしを申し述べんとて予を始め家内のものにも聞けよとて涙をながし、かく思ひ出すも、かたるもかなしけれ、我れ十一歳の六月十九日の八つ時ごろ、母樣の年永き病ひの床に入りて撫でさすりしてありしが、此の日の暑さ耐へがたきまゝ汗を流し今日は暑き日なりと申せしかば、

御母樣は我が顏を見給ひて嘸な〳〵暑かるべし。他の家の童は皆川遊びなどに行き樂しむに、坊んは少しも我が傍を去らで、かゝるむさき床にありて心づくしの其の

看病、何時の世とても忘るまじ、母も今日は快く些と歩行も見たき志もあれば、坊んをつれて向ふなる森に行つて涼ますべしとの給ふに、幼な心のかなしくも我が暑きと申せしまゝに母は苦しきをも隠し、我を涼まし申さんとのあつき御心とも知らで、杖と草履をあたへしかば、御片手には杖をたすけに又御片手にはかひなき我が手を力にして門を出で、七八間も行きし時にの給ふは、坊んよ御となりより賜はりし餅が赤き器物に入りてこそありしなり。是をとりて來らるべし森の蔭にて與ふべしとのことに順ひ、速に四五間ほども歸りしが、何んとなく胸うちさはぎ心ならざりしかば立ちかへり、母が御顏を見あげしに、母なる人は御兩眼よりたら〳〵と涙を流し、いとかなしげに立ち給ひしに、驚きて走り行き抱きつきて如何し給ふ、御心持ちやあしくあらせ給ふかと、申せし我を抱きしめ給ひて、坊んが如くに可愛きものに此の母はかゝる病の今も知らで死しなんことの計り知られず。死する身はさら〳〵厭ふにあらねども、汝に別れんことのかなしくも、我又死なば汝が歎き如

何ばかりと、只こゝにこそ迷ふなり。との給ひしに母様必ず〳〵死し給ふな。死し給ふならば我をも共にいざなひ給へと、大聲あげて歎きしが、向ふの森へ至りて母様の申し給ふには、恕して呉れよ譯もなき母が愚痴にて幼きものを歎かしたり、機嫌直し此の餅食べ給へと、賜はりしを我口の中へ入れ侍りしが、不斗母様の姿を見れば世にもやつれて色あしく、物思ひなる顏色に餅も喉を越しかねしかば母は猶も我をあはれみて、何卒いくつも〳〵用ひ給へとの給ふ時に、幼き心にも不計も是が此の世の御別れかと、思はず、餅を吹出し母様〳〵息才に長命をこそなしたべ、と母にしがみ取りつきしかば母も我を抱きしめ、只聲をあげてなげきし折ふし隣家の翁の來り給ひて、母を脊に負ひ我を前に抱きて我家へこそ連れ歸り給ひしが、我此の時に實に誠に親の御恩も知り、又是よります〳〵御大切になりて、もう今日が母に別れる日か〳〵と只何事も大切に致し、其の夜に入りいぬる前にはあゝありがたや今日も母に分れぬことのうれしさよ。又明日に至れば今日がひよつと分れる日で